

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科

看護実践研究指導センター年報

平成30年度



CHIBA UNIVERSITY

巻頭言

全国の看護系大学、医療機関をはじめ多分野の方々のご協力と参画により、平成 30 年度も看護学教育研究共同利用拠点(拠点)として、諸事業を行うことができました。年報により事業報告を致しますとともに、心からお礼申し上げます。

本年度は主に二つの事業に取り組みました。

一つは、「看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進」(平成 28-31 年度)です。この事業の目的は、各々の看護系大学および教員にとって、自律的に教育の質を保証するための手がかかりとなるような CQI モデルを開発すること、および CQI モデルを活用して、看護系大学における相互支援あるいは個別支援の体制を構築することです。看護系大学の新設が続き、多様性が益々拡大するとともに社会的影響が増す中で、各々の看護系大学が特色を活かして機能分化しながら、より効果的に連携し、看護学教育機関に対する社会的要請に応えることを拠点として支援し、推進することをめざしています。本年度は、看護学教育ワークショップにて、開発した CQI モデル Ver.1 を紹介し、一大学の CQI の取組み事例に適用し、ついでワークシートを活用したグループワークにより相互支援を行い、活用を推進しました。

もう一つの事業は、「学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究」(文部科学省調査研究委託事業 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究;平成 30-32 年度)であり、地域や設置主体の多様な 5 大学とともに取り組んでいます。この事業の目的は、各看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、実施・評価する体制を構築するための多様な方略を明らかにすること、および全国の看護系大学におけるそうした方略の活用を推進することです。地域社会の変化および自大学がめざす看護職の輩出に即した臨地実習体制とするには、講義、演習を含めて検討し、教育の質保証に向けたカリキュラム改革が必要と考えます。

CQI モデルを活用して、教員あるいは大学として自らのありたい姿を描き、この委託事業により明らかにした改革の多様な方略を、看護系大学各々の特性に沿って活用し、継続的に展開することにより、教育の質保証が可能になると考えます。さらに、これら二つの事業と連繋させながら、研修事業(看護学教育ワークショップ、看護学教育指導者研修、国公立大学病院副看護部長研修、看護管理者研修、看護系大学 FD 企画者研修)および共同研究を行いました。

自大学の状況をより客観的に捉え、地域および大学の状況に即して看護職を養成し、看護系大学としての特徴を明確にする上で、他大学の状況に関する情報が必要であり、先進的な取組みのモデル化が有用と考えます。センターでは、今後さらに各事業と情報集約・発信の機能を強化して、看護系大学大学間の相互支援、ネットワーク形成を推進し、各看護系大学の個性化を支援したいと考えています。

平成 31 年度は、第二期の拠点としての最終年度にあたり、看護学教育研究に関わる全国の皆様により活用され、貢献できるように、中村伸枝看護学研究科長を中心に、今後もセンター教員と看護学研究科教員が協力して努めますので、どうぞよろしくごお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月 31 日

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
センター長 吉本 照子

目次

巻頭言

I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターの概要	1
1-1. 設置概要	
1-2. 目的	
1-3. 活動基本方針	
II. 2018年度事業概要	3
1. 看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクト：2016-2019年度・・・	3
2. 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業.....	15
3. FD支援.....	20
1) 看護学教育ワークショップ	
2) 看護系大学FD企画者研修	
3) 看護系大学への個別支援	
4. SD支援.....	26
1) 国公立大学病院副看護部長研修	
2) 看護学教育指導者研修ベーシックコース	
3) 看護管理者研修ベーシックコース	
5. 共同研究.....	38
■共同研究1 教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える 看護学教育向けFDコンテンツの開発と評価・・・	
■共同研究2 看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究	
■共同研究3 公的病院におけるELNEC教育プログラムの開発	
■共同研究4 FDコンテンツ開発（国際） －10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流－	
■共同研究5 合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発	
■共同研究6 組織の現状を踏まえた研修企画を支援する方法の開発	
6. 情報発信ネットワーク化.....	51
III. 各研究部における研究内容	53
1) ケア開発研究部	
2) 政策・教育開発研究部	
IV. 看護実践研究指導センター活用実績	55
V. スタッフ紹介	56
VI. 資料	58
1) 教育・研究活動実績	
2) 職員配置	
3) 看護実践研究指導センター運営協議会記録	
4) 看護実践研究指導センター運営委員会記録	
5) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程	

I. 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター概要

1-1. 設置概要

1) 昭和 57 (1982) 年 4 月 1 日 全国共同利用施設として設置

看護学が独自の教育研究分野を確立しつつあった昭和 50 年代半ば、高齢社会の進展、医療資源の効率的運用等の実践的課題に対応する研究、指導体制の確立がせまられていた。そのような背景のもと、千葉大学看護学部で全国共同利用施設として、附属看護実践研究指導センターが設置された。看護系大学の教員等、看護学分野の調査研究に従事する者、看護職員の指導的立場にある者の利用に供することを目的として、共同研究、専門的研修等が実施されてきた。

2) 研究部の構成

設置当初は、継続看護研究部、老人看護研究部、看護管理研究部の 3 研究部から構成されていたが、より柔軟で時代に即した活動が展開できるよう、平成 19 (2007) 年 4 月から、政策・教育開発研究部、ケア開発研究部の 2 部構成となり、現在に至る。

3) 平成 21 (2009) 年 研究科附属へ

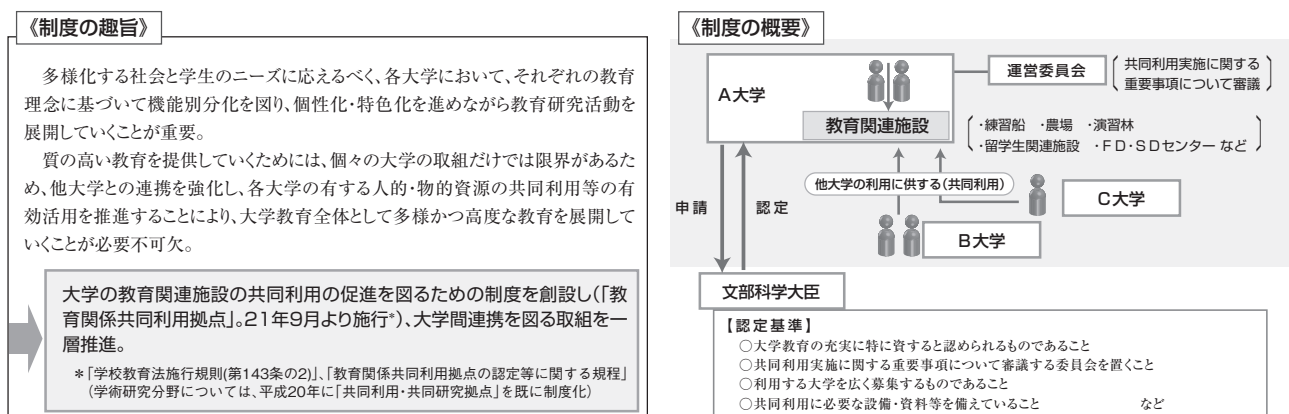
看護学研究科の部局化に伴い、附属看護実践研究指導センターも研究科附属となった。

4) 看護学教育研究共同利用拠点の認定

平成 22 (2010) 年度に文部科学大臣より、教育関係共同拠点*として認定され、「看護学教育研究共同利用拠点」として活動している。平成 27 (2015) 年度に再認定され、第 2 期の活動中である。看護学分野では唯一の拠点である。

*教育関係共同拠点とは

平成 30 年 9 月 5 日現在、大学の職員の組織的な研修等の実施機関、留学生日本語教育センター、練習船等の施設が文部科学大臣より「教育関係共同拠点」として認定されています。「看護学教育研究共同利用拠点」は大学の職員の組織的な研修等の実施機関 17 のうちのひとつであり、かつ、看護学分野としては唯一の拠点です。教育関係共同利用拠点制度は、多様化する社会と学生のニーズに応えつつ質の高い教育を提供していくために、各大学の有する人的・物的資源の共同利用等を推進することで大学教育全体として多様かつ高度な教育を展開していくことが重要であることから、平成 21 年 9 月に文部科学大臣によって創設されました。本制度の概要は以下のとおりです。



1-2. 目的

社会が期待する看護の価値の創造に向けて、実践－教育－研究をつなぎ、全国の看護系大学および地域の関連施設の機能の充実・発展をめざす

1-3. 活動基本方針

- 1) 各看護系大学、関係機関等の自律的な活動を支援する
- 2) 大学間、利用者間の相互支援を重視する。
- 3) 看護学教育の質保証のためのFD支援、SD支援を実施する。
- 4) 当センターと利用者の双方向の良循環をつくり、活動を推進する（利用者は最先端の情報や課題を持ち寄り、当センターは必要なニーズを把握、事業の企画と運営を行い、利用者が参画する）。

II. 2018 年度事業概要

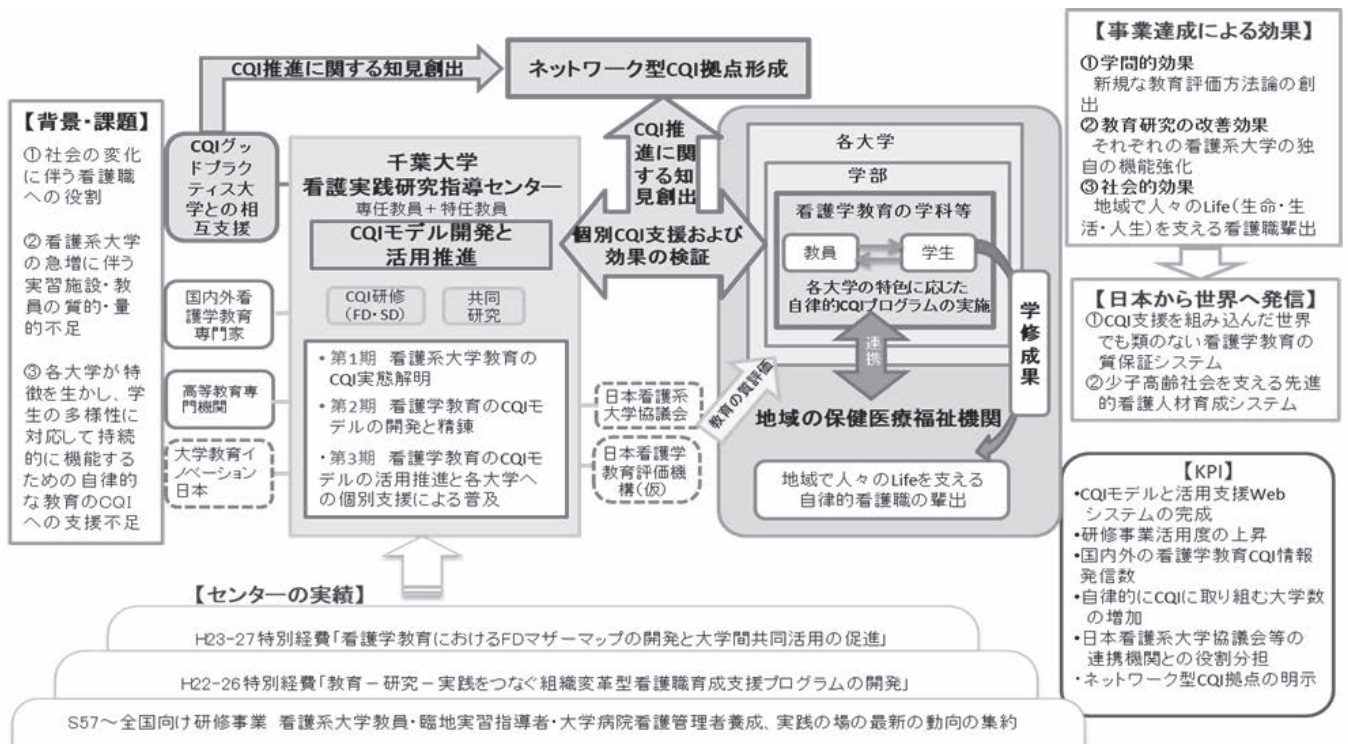
1. 看護学教育の継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクト

1) 目的と計画

本プロジェクトの目的は、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善（CQI：Continuous Quality Improvement）モデル開発および活用推進により、全国の看護系大学の自律的・持続的帰納強化を支援することである。その結果、国がめざす「効果的な医療提供体制の構築」の課題を推進し、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える看護職を輩出することにつながると思う。

平成 30（2018）年度は、4 年間のプロジェクトの 3 年目であり、モデル開発と活用推進を実施した。

プロジェクトの全体図



事業進捗と計画

	平成28年度	平成29年度(実施中)	平成30年度	平成31年度
事業フェーズ	第1期:看護系大学教育のCQI実態解明		第2期:看護学教育CQIモデル開発	第3期:CQIモデルの活用推進
CQIモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> ● CQI全国調査 ● CQI事例研究準備 	<ul style="list-style-type: none"> ● CQI全国調査 ● CQI事例研究 ● CQIモデル試案作成 	<ul style="list-style-type: none"> ● CQIモデルの活用説明会実施 ● 活用協力校の募集、選定、ルールの決定と共有 ● CQIモデルの精練・完成 	<ul style="list-style-type: none"> ● CQIモデル活用支援の効果検証 ● CQI推進者研修プログラムの開発 ● 全国CQI調査の実施と分析
実施内容	各大学個別CQI支援			
	<ul style="list-style-type: none"> ● FDマザーマップ活用の効果検証 	<ul style="list-style-type: none"> ● 各大学要請対応型CQI支援 ● FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> ● CQIモデル活用型CQI支援 ● 各大学要請対応型CQI支援 ● FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> ● CQIモデル活用型CQI支援 ● 各大学要請対応型CQI支援 ● FDマザーマップ活用型FD支援
	<ul style="list-style-type: none"> ● CQI研修事業 ● CQIコンテンツ開発 	CQI研修の拡充+FD&SDコンテンツ開発		
	看護学教育ワークショップ(10月)	看護学教育ワークショップ(10月)	看護学教育ワークショップ(10月)	看護学教育ワークショップ(10月)
	ネットワーク型CQI相互支援体制の確立			
	事業評価と発信			

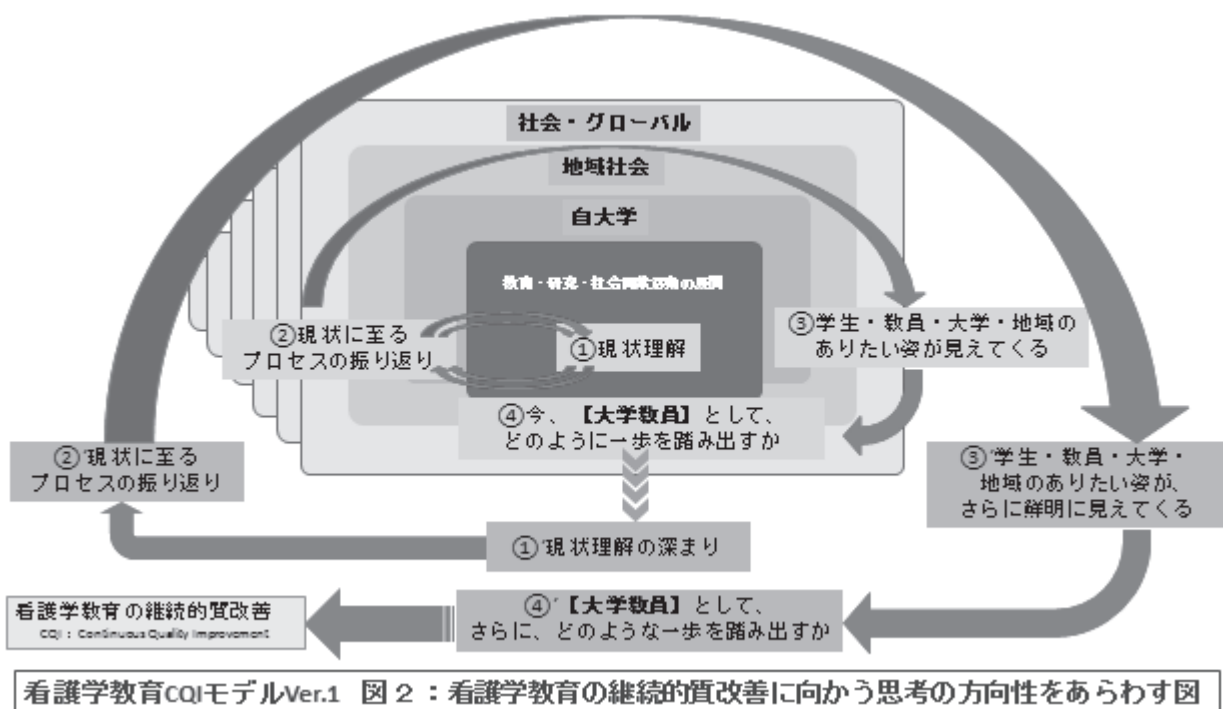
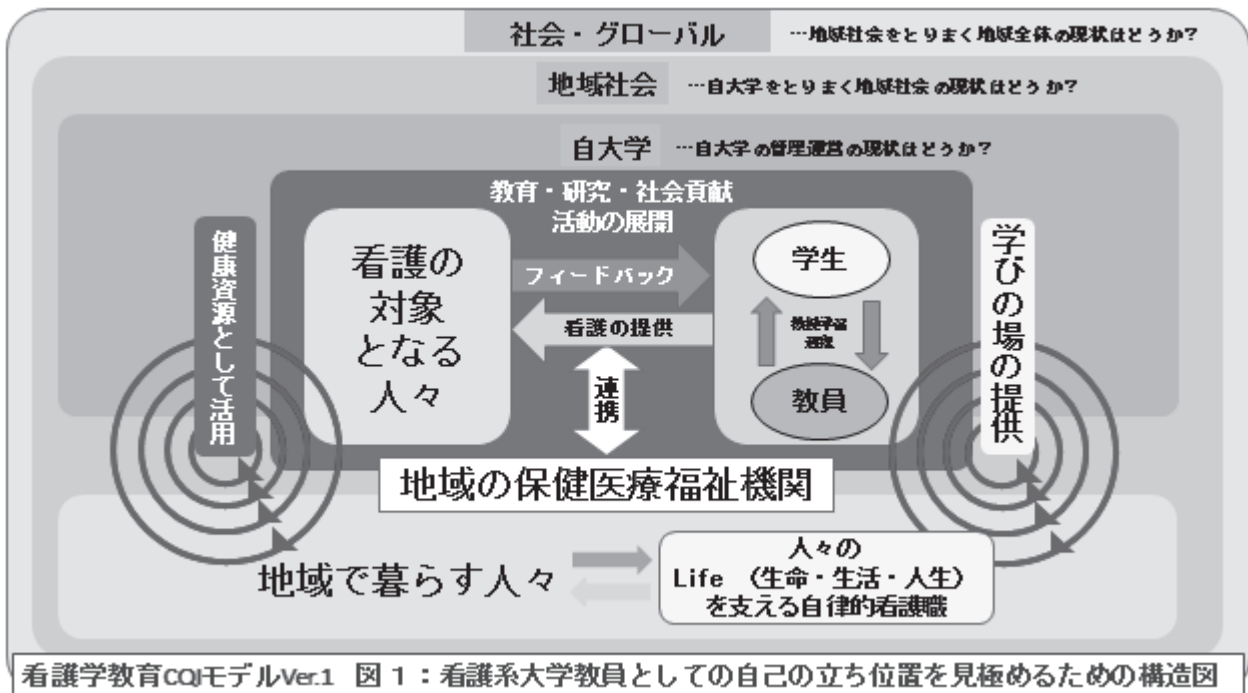
2) CQIモデル Ver.1の開発

モデル開発では、これまでの看護系大学への支援の実績をふまえて、モデルの要件を学内会議で検討した。CQIにおいては、自大学を多角的に捉えなおすこと、大学のありたい姿を描き、CQIに踏み出す方向に思考を支援する必要性があることを確認した。そこで、2つのモデル図で構成するCQIモデルの試案を作成した。

次に、看護系大学教員6名に学外専門家を依頼し、専門家会議(8月30日)で意見の聴取を行った。専門家会議に出席できなかった2名からは、個別にヒアリングを行った。試案を修正し、CQIモデル Ver.1を完成させた。CQIモデル Ver.1は、「図1. 看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図」、「図2. 看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図」で構成された。

看護学教育における継続的質改善(CQI)モデル開発に関する専門家会議 名簿

新潟青陵大学 看護学部	教授 渡邊典子 先生
熊本保健科学大学 保健科学部看護学科	教授 中村京子 先生
宮城大学 看護学群小児看護学	教授 武田淳子 先生
横浜市立大学 医学部看護学科老年看護学領域	教授 叶谷由佳 先生
鳥取大学 医学部保健学科基礎看護学講座	教授 深田美香 先生
日本赤十字看護大学	教授 佐々木幾美 先生



また Ver. 1 では、鮮明になった目標像に向かってどのように行動するのかについては説明できていない。CQI を推進していく上での能力を明らかにすること、必要な戦略活動を説明するモデル図を開発することを今後の課題とした。

3) 看護学教育ワークショップの企画・開催

昨年度の看護学教育ワークショップでは、本プロジェクトの一環として、「CQI の戦略を練る」をテーマとして取り上げたが、多くの参加者が、現在のやらなければいけないことに追われ疲弊しており、CQI に意欲的に取り組むエネルギーが枯渇している状況を訴えていた。そこで、本年度は、開発中の CQI モデルを使ったワークを通して、参加された方々にとって、自大学の見方を変える、CQI へのエネルギーを得る機会になることを目指して企画した。また CQI を推進する上で必要なことを参加の方々の声から考える機会としたいと考えた。

そのため、1 グループ 5 名程度で、1 人にじっくりと時間をかけるワーク内容を検討し、CQI モデル Ver. 1 を活用してもらうためのワークシートを開発し、準備をすすめた。

(1) テーマ

自大学の強みや使命を活かす CQI—自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る

(2) 目的

参加者が自大学で看護学教育の継続的質改善 (CQI) を推進することに向けて、開発中の CQI モデルを使ったワークを通して、自大学をとらえなおし、CQI へのエネルギーを得る機会とする。

(3) 実施方法

- ①期間 平成 30 年 10 月 29 日 (月) ~10 月 30 日 (火) 2 日間
- ②会場 千葉大学けやき会館 (千葉市稲毛区弥生町 1-33)
- ③参加要件 グループワークを実施する全日程参加者は、看護系大学において組織的な教育の質改善 (CQI) を推進する教員で、原則として准教授以上
- ④主催 看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
- ⑤参加費 講演・報告の部のみ 5,000 円、全日程 20,000 円 (往復旅費、宿泊費、昼食代含まず)

(4) プログラム概要

<報告・講演の部 1 日目午前>

報告「CQI モデル開発の経緯と CQI モデル Ver. 1 の紹介」

当センター教授 和住淑子

講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」

文部科学省看護学教育専門官 杉田由加里氏

講演「外部指針を CQI にどのように使うか」

当センター准教授 黒田久美子

報告「CQI 取組事例の紹介と CQI モデルの事例への適用」

熊本保健科学大学保健科学部看護学科 教授 中村京子氏

熊本保健科学大学保健科学部看護学科 准教授 荒尾博美氏

当センター教授 和住淑子

<全日程参加者のワーク 1日目午後・2日目>
グループワーク、交流会、全体ディスカッション

(5) 実施体制

①千葉大学運営組織

大学院看護学研究科長 中村 伸枝 教授

センター教員会議および実行委員会

- ◎ 吉本 照子 教授
- 野地 有子 教授
- 手島 恵 教授
- 和住 淑子 教授
- 黒田 久美子 准教授
- 銭 淑君 准教授
- 田中 裕二 准教授
- 佐藤 奈保 准教授
- 飯野 理恵 講師
- 湯本 晶代 助教
- 稲垣 朱美 特任助教

(◎ センター長・企画責任者 ○実行委員長)

②グループワークファシリテーター

- 1G : 吉本 照子 千葉大学大学院看護学研究科 教授
- 2G : 野地 有子 千葉大学大学院看護学研究科 教授
- 3G : 諏訪 さゆり 千葉大学大学院看護学研究科 教授
- 4G : 谷本 真理子 東京医療保健大学医療保健学部看護学科 教授
- 5G : 吉田 澄恵 東京医療保健大学千葉看護学部看護学科 教授
- 6G : 銭 淑君 千葉大学大学院看護学研究科 准教授
- 7G : 田中 裕二 千葉大学大学院看護学研究科 准教授
- 8G : 飯野 理恵 千葉大学大学院看護学研究科 講師
- 9G : 和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科 教授
- 湯本 晶代 千葉大学大学院看護学研究科 助教
- 10G : 黒田 久美子 千葉大学大学院看護学研究科 准教授
- 稲垣 朱美 千葉大学大学院看護学研究科 特任助教
- 11G : 斉藤 しのぶ 千葉大学大学院看護学研究科 准教授

(6) 実施概要 (ワークショップ報告書の総括より)

1. 全国の看護系大学 276 校のうち、約 1/3 の 89 大学 101 名 (講演と報告の部のみの参加者含む) が参加し、看護学教育行政の動向と看護系大学への社会からの役割期待、CQI モデル Ver. 1、CQI における外部指針の活用、さらに CQI の変革の事例について共有した。

続いて、全国の看護系大学の約 20%、56 大学 57 名が個人・グループワークに参加し、各参加者が多忙な日常から離れて、状況の捉えなおしや方略のアイデア創出のために相互支援を行い、自大学の CQI の方略を検討した。参加者の職位は教授 29 名、准教授・講師 28 名であり、次世代を含めて、各大学の CQI の推進に関する連携の機会の一つとなった。

2. 各講演の有用性について、講演と報告の部のみの参加者、全日程参加者ともに、90%以上が「CQI モデル試案」、文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」を「非常に役立つ」あるいは「役立つ」と回答した。自由回答では、CQI モデル Ver. 1 あるいは記録用紙の有用性とその理由について、自大学および他大学の状況の理解に有用、FD としてなすべきことへの気づき等が記述された。これらの結果から、看護学教育行政の動向のもとで、CQI モデル Ver. 1 はその内容が理解され、全国の看護系大学において活用の可能性があるかと判断できる。

一方、主に講演と報告の部のみの参加者から、より多くの実践例への要望があり、CQI モデルの活用推進のために、今後、CQI モデル Ver. 1 の精練と効果の検証について継続発信する必要がある。

〈CQI モデル Ver. 1 あるいは記録用紙の有用性〉

- ・図 1 を使いながら自大学の説明をすると普段意識していないことも考えるきっかけとなるため、自大学の見方を広げることができた。
- ・ワークシートに気づいたことをどんどん書き入れていくことで気づきが広がった。
- ・グループワークでシート A と図 1 を使うことで原因の関連性が明確になった。発表し他のメンバーから意見をもらうことで自大学の良さに気づき、解決方法のヒントとなった。
- ・時間をかけてあらためてストーリーを組み立てたことで、まず自分（個人）ができること（取り組むことが）がみえた気がする。

3. 全日程参加者は他大学との意見交換により、自大学をより客観視し、強み・弱み、あるいは課題に気づき、自らの立場でできることのヒントを得ていた。また、多様な看護系大学の共通の課題に気づいていた。これらの結果から、本ワークショップは、参加大学の連携の必要性と有用性の認識を促す機会となったと判断できる。

〈自大学の課題解決の手がかりの獲得〉

- ・他大学の現状を知る中で、自大学の在り方を見直す機会となり、活発な意見交換から自大学でも実践的に取り入れることができる方策に示唆を得られた。自大学の問題について解決のヒントをいただけたことも大きな収穫だった。
- ・「自学のとらえなおし」というよう、個人（自ら）の教育プロセスの見直しにつながった。“エネルギーを得る”というより解決プロセスや解決策を具体的に得ることができた。

〈他大学との共通の課題への気づき〉

- ・様々な大学の実情も理解できた。それぞれの状況の中でそれぞれが模索しながら努力していると思った。
- ・程度に差はあるものの、共通する課題、悩みや困り事があることを改めて実感した。
- ・国立・公立・私立大学で捉える課題についてその特徴の違いなどよく分かった。それに対する対策については、共通する事も多くあるように感じた。

4. 参加者は他大学の CQI の取組みを知り、あるいは意見交換を行うことにより、CQI への多様なアイデアを得て意欲を高めていた。

〈他大学の状況の理解や教員との意見交換による CQI に関するエネルギーの高まり〉

・WS の内容そのものも満足度が高いが、グループの先生方とつながりができたこともエネルギーを頂けたと感じる。地方の単科大学なので、今回このような他の地域の様々な大学の先生方と情報交換・意見交換ができる機会があれば自己啓発のエネルギーになる。

・エネルギーが本当に得られるのかどうか、半信半疑だったが、語ること、助言をもらうことの相互作用の中で、小から大まで複数のアイデアが浮かんできた。あとは行動にうつすのみだと思う。

・熊本保健科学大学の先生方のご発表にとっても力づけられた。(講演と報告の部のみの参加者)

2019 年度は、CQI 事業の最終年度として、CQI モデルの活用の効果を検証し、ワークショップ等で活用を推進する。

4) ワークシートの冊子体及び電子ブックの作製

看護学教育の CQI モデルの活用促進とさらなる開発に向けて、Ver.1 までのモデル図を示し、活用のためのワークシートを紹介するために、冊子体及び電子ブックを作製した。電子ブックは当センターのホームページから閲覧できるようにし、ワークシートをダウンロードできるようにした。CQI モデル Ver.1 を参照していただき、使用された方々からとの意見交換を通して、さらなるモデル開発をすすめていきたい。

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____



ワークシート A：自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する

1) 自大学の現状について、現在気になっていることを以下の視点から振り返り、自由にメモしてみましょう。

- 視点1：学生の現状はどうか？
- 視点2：教員の現状はどうか？
- 視点3：教育・研究・社会貢献活動の現状はどうか？
- 視点4：自大学の管理・運営の現状はどうか？
- 視点5：自大学をとりまく地域社会の現状はどうか？
- 視点6：地域社会をとりまく社会全体（含グローバル）の現状はどうか？

2) 図1を見ながら、1)でメモした気になっていることは、図1のどこに位置するのかを考え、図中に○印をつけてみましょう。

3) ご自身が気になっていることに関連のありそうな事実を、できるだけ多面的に集めてみましょう。

関連のありそうな事実（メモ）	記入例
【自大学の沿革、設立の理念】	<ul style="list-style-type: none"> ・設置主体は学校法人（私立大学） ・地元代々の医師一族が、地域の人々の医療を支える人材を輩出することを理念とし、地域の期待もあり開学した
【学生の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・なんとか定員充足しているが、合格者の学力格差が大きい ・授業についていけない学生がおり、個別学修支援ニーズが多い ・全員を国家試験に合格させるのが大変な状況
【教員の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・地方の新設看護大学なので教員がなかなか集まらず、教員確保に難渋している ・年齢も経験もさまざま
【教育・研究・社会貢献活動の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・学部教育だけで手いっぱいであり、研究・社会貢献活動まで手がまわらない ・大学院開設は開学時には想定していたが、懸案のまま保留となっている
【自大学の管理・運営の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・医師である理事長のトップダウンで物事が決まる
【自大学をとりまく地域社会の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・基幹産業は農業で、人口流出が激しい ・大学には地域創生を期待されている ・附属病院はないが、地域の医療施設とは良好な関係にある
【地域社会をとりまく社会全体（含グローバル）の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・社会保障費の増大が国家予算を圧迫 ・地域包括ケアシステムの構築が進んでいる ・病床機能分化が進んでいる ・大学進学率の上昇

4) ご自身が気になっていることと、それをとりまく自大学・地域・社会全体は、どのようにつながりあっているのでしょうか？ その関連性を記述してみてください。（メモや箇条書きでよいです）

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

所属大学名 _____

職位 _____

氏名 _____

B

ワークシートB：自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとして語る

1) 図2の①、②のように、現状とその現状に至るプロセスを振り返りながら、自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとしてグループメンバーに説明してみてください。必要なら、以下に、説明用のメモを作りましょう。

2) グループメンバーから受けたフィードバックの内容を以下に記述してみましょう。

3) 新たに気づいたことがあれば、以下にメモをしてください。

ワークシートC：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す

1) これまでのプロセスを経て見えてきた③学生・教員・自大学・地域のありたい姿を、ご自身の言葉で記述してみてください。

☆多思考のヒント☆ 個人レベル、専門領域レベル、学部・学科レベル、大学レベルなど、どのレベルで考え始めてもよい

☆多思考のヒント☆

- ・図1の登場人物の各々について、ありたい姿を考えてみる（ありたい姿は、自分本位や、机上の理想論ではなく、現実在即し未来に向かう姿として考えてみる）
- ・以下のような問いかけて、図1の登場人物の各々についてありたい姿を考え、短いフレーズや単語で表現してみる
 - 例) 「人々のLifeを支える自律的看護職」、「地域で暮らす人々」とはどのような人か
 - 例) そのためにはどのような「学びの場」があったらよいか、どのような「学生」であったらよいか、どのような「教員」であったらよいか
 - 例) 「地域の保健医療福祉機関」のありたい姿とは
 - 例) 学生が実習で看護を提供する「看護の対象となる人々」とはどのような人であったらよいか

2) 見えてきたありたい姿に向かって、今、何ができそうか、何をしてみたいか、なるべく具体的にアイデアを出してしてみましょう。

☆多思考のヒント☆ 協力を具体的にイメージしてみる 脅威はチャンスにならないか？ 弱みは強みにならないか？

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート

D

所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

ワークシート D：自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題

- 1) 見えてきたりたい姿に向かい、CQIをすすめる上で、自大学で必要になること・課題はありますか？
- 2) その解決に向けて、どのような戦略をとったらよいでしょうか。グループでディスカッションをしてみましょう。

5) フォローアップ調査

看護学教育ワークショップから2か月後（1月初旬の2週間）に、フォローアップ調査を実施した。看護学教育ワークショップが参加者のCQIの推進にどのように貢献できたか、当センターが支援できることはあるかを知り、今後活かす目的でおこなった。

35大学から回答があり、2か月後の時点においても「自大学をとらえなおすことができた」、「CQIへのエネルギーをえられた」への回答は多かったが、CQIへの実施における困難として、自大学における合意形成に労力を費やす状況や、他大学の同様の取組を参照したい希望等があげられていた。また、本調査がきっかけで、停滞していた活動をはじめた大学もみられた。

フォローアップ調査結果からは、課題としていたCQIを推進していく上での能力を明らかにすること、必要な戦略活動を説明するモデル図を開発することの必要性があらためて確認できた。フォローアップ調査で、今後、当センターから連絡してもよいと回答を得た大学の協力を得て、個別事例で、CQIの推進を支援するモデルを開発していく予定とした。

6) 看護学教育のCQI（Continuous Quality Improvement）に関する事例研究

—モデルVer.2開発に向けて

以下を目的として、看護学教育のCQI（Continuous Quality Improvement）に関する事例研究を開始した。

- ①看護学教育のCQIモデルver.1の効果を検証する。
- ②看護学教育のCQIを推進するために必要な戦略活動を説明するモデル図（以下、実行モデル図）を開発し、CQIモデルver.2を開発する。
- ③組織的に看護学教育のCQIに取り組む者に必要な能力を明らかにする。

なお、本研究における「看護学教育のCQI」とは、看護系大学の教員が実施している自大学の看護学基礎教育課程における教育の質改善活動のうち、組織的に行っており、回答者が継続的な質改善につながる取り組みと判断しているものをいう。

研究方法は、看護系大学を対象とした個別事例研究であり、インタビュー、ワークショップ時のワークシートやCQI実施の関連資料をデータ収集する。看護学教育のCQIモデルver.1をどのように活用できたのか、またその後のCQIの推進状況についてインタビューし、個別のCQIのプロセスを描き、推進要因、阻害要因、CQI推進に必要な能力を明らかにする。

本研究科の倫理審査の承認を得て、フォローアップ調査時に連絡をとってもよいと回答した14看護系大学に協力を依頼し、年度内に可能であった5大学へのインタビューをすすめている。

2. 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業

学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究

本事業は、平成30年度～3年間の計画で当センターが受託した、文部科学省の調査研究委託事業である。

1) 背景

近年、地域包括ケアシステムの構築が進むにつれ、患者の療養の場は、病院から、ケア施設や自宅へと大きく変化しつつある。病床の機能分化も進み、看護の対象者の多くは、病院の病棟ではなく、外来、地域のケア施設などの非医療機関、自宅に存在するようになった。それに伴い、看護職に期待される役割も、従来の病院に入院している患者への看護のみならず、外来通院しながら自宅で療養する患者を支援する役割、地域のケア施設などの非医療機関で介護・福祉職と連携しながら看護を展開する役割、患者の自宅へ訪問し看護を提供する役割、さらに、各地域のニーズに即したケアサービスのあり方を探索し、新たなケア資源を開発し、地域包括ケアシステムを発展させる役割へと、ますます拡大してきている。

看護学教育の第一義は、「看護の対象者がどのような場にいたとしても、その人のより健康的な生活の実現に向けて看護の必要性を見抜き、必要な看護を提供できる能力を修得」させることにある。学士課程を卒業した学生が、人々が看護を必要としている場でその力を発揮し、社会に貢献していくためには、学士課程教育において、社会の変化に即して拡大しつつある看護職の役割を自律的に果たす能力を修得する必要がある。

このような学生の修得すべき能力の統合に重要な臨地実習に焦点をあてて、看護系大学の学生および教員の現状を見てみると、以下のような状況があることがわかる。

学生については、社会人経験を有する学生、あるいは合理的配慮を必要とする学生等、学生の多様性が増大している。したがって、教員は各々の学生が、看護職としての自らの特性と能力に気づき、発揮するように、指導力および実習施設との調整力等の教育力を高める必要がある。

一方、看護系大学の急増に伴い、大学教育の経験の少ない教員が増加し、教員の流動性も比較的高く、中には、欠員を抱えている大学、あるいは世代交代期の大学もある。これは、教育組織の構築途上あるいは再構築の段階にあることを意味しており、今後の教育環境に即して、1人ひとりの学生に対する教育の質を保証するための方略について、領域間、職位間等の合意形成の必要な時期にある。

こうした学生と教員の動向に、教育環境の変化を重ねると、以下の二つの達成すべき課題があることがわかる。①実習環境と教育対象である学生の変化に即して、教員および臨地実習指導者が、従来の実習の概念を変革し、組織的な教育力を高め、②各々の学生が、少子超高齢社会を担う次世代の自律的な看護職として、より長期間活躍できるように、自己教育力開発およびキャリア開発の支援を強化する、という課題である。

このような課題に対し、実習環境の激変および看護学教育に対する社会的要請を見据えて、外来、ケア施設などの非医療施設、離島での実習を導入するなど、臨地実習指導体制の改革をはかる看護系大学も出始めてはいる。しかし、これらの改革は、それぞれの大学の置かれた地域の特性を踏まえた一部の教員の工夫やアイデアに留まり、看護学教育として体系づけられ、他大学も参照できるような形式で公表されているわけではなく、各大学が十分に活用しうる支援体制も整備されていない。

当然ながら、社会の変化に即して拡大しつつある看護職の役割を果たすための能力を、学士

課程教育において体系的に修得するためには、臨地実習体制の改革を含むカリキュラム全体の改革が欠かせない。しかし、学士課程カリキュラムについては、看護師国家試験受験資格に係る保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の規制もあることから、画一的なものになりがちで、社会の変化に即した十分な改革ができていない状況にある。

また、変化する社会に即した学士課程カリキュラムの改革に向けては、看護学教育モデル・コア・カリキュラムをはじめとする各種外部指針が公表されている。しかし、もとよりカリキュラムとは、一律の形式で外部から強制されるものではなく、これらの外部指針を参照しつつ、大学の置かれた地域の現状等に応じて、大学の特性を十分に活かしながら、各大学および教員が、主体的に研究開発し、実施していくものである。さらに、新たな実習フィールド、新たな実習体制、実習方法の開発や、教育の成果である到達度評価については、卒業生や地域における多様なステークホルダーとのコミュニケーションを欠かすことができない。

したがって、看護系大学が、医療人養成にかかわる社会からの要請に応えるためには、社会の変化に即して臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する方略および体制を、各大学の内部において構築する必要がある。全国の看護系大学における方略および体制の構築の現状に対し、先行して取り組んでいる事例等の方略とその考え方を大学相互に活用し、支援し合いながら、より効果的・効率的に改革を進める必要がある。

2) 調査研究の目的

看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明し、それを成果物として公表するとともに、看護学教育ワークショップ開催等の効果的な普及方策を考案して、全国の看護系大学に普及する。

3) 調査研究の進め方

本調査研究は、

〔研究1〕社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の改革に関する全国調査

〔研究2〕臨地実習指導体制をはじめとする学士課程教育の改革に着手している看護系大学に関する個別事例研究

〔研究3〕社会の変化に即した看護学教育カリキュラム改革のための方略の解明と普及の3つで構成する。

看護系大学は、地域特性や設置主体、附属病院の有無等により、実習環境をはじめとする教育の諸条件が大きく異なる。このため、

〔研究1〕では、まず、全国調査を行って、変化する地域社会、医療現場に見合った新たな実習フィールドの開拓、新たな実習体制と実習方法の開発、支援ニーズに関する全国的な状況を把握する。

〔研究2〕では、社会の変化を見据えて、すでに臨地実習指導体制の改革に着手している看護系大学が、1)どのようにして、地域社会の変化を読み、新たな実習フィールドを開拓し、新たな実習体制・実習方法を開発し、自大学の学士課程カリキュラムを改革しているのか、2)教育の成果である到達度評価はどのようにしているのか、3)その過程においてどのように各種外部指針を活用しているのか、4)どのような課題を有し支援を必要としているのか、を個別にインタビュー調査する。

〔研究3〕では、〔研究1〕〔研究2〕の成果を踏まえ、看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づ

いて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略を解明し、普及する。全国の看護系大学への研究成果の普及を通して、最終的には、地域包括ケアシステムの構築が進む地域社会において、人々が看護を必要としている場で力を発揮できる自律的看護職の輩出、という成果を目指す。3年間の取り組みの全体像を以下の図に示す。

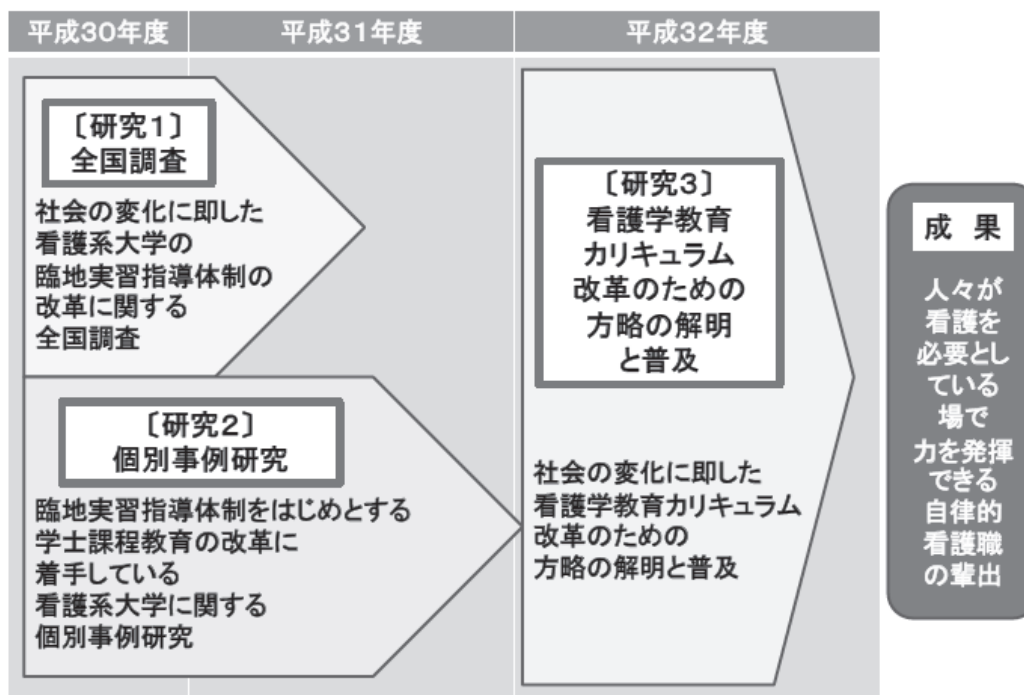


図:本調査研究委託事業における3年間の取り組みの全体像

なお、本調査研究は、文部科学大臣認定の看護学教育研究共同利用拠点である本学大学院看護学研究科附属看護実践研究センターが中心となり、地域特性や設置主体、附属病院の有無等の実習環境をはじめとする教育の諸条件の類型が異なり、各地域の役割期待に貢献してきた表1の看護系5大学と共同で実施する。このような実施体制により、全国の看護系大学の教育環境の類型の多様性に対応した成果をめざす。

表1 共同研究大学一覧

地域	大学名	学部・学科等名称	設置主体	附属病院の有無
東北ブロック	宮城大学	看護学群看護学類	公立	無
中部ブロック	新潟青陵大学	看護学部看護学科	私立	無
関東ブロック	横浜市立大学	医学部看護学科	公立	有
中国ブロック	鳥取大学	医学部保健学科看護学専攻	国立	有
九州ブロック	熊本保健科学大学	保健科学部看護学科	私立	無

4) 平成30年度の実施状況

〔研究1〕社会の変化に即した看護系大学の臨地実習指導体制の改革に関する全国調査

(1) 全国調査のための調査票試案の作成

調査項目は、設置年、設置主体、所在地域、教育理念、教育体制と教員の研究教育実績、学生数、卒業生の進路および就職先等の基礎データ並びに、①どのような地域社会、医療現場の変化に直面しているのか、②次世代の医療職としての学生が担い、変革すべき地域社会および医療現場のそうした変化をどのようにとらえ、どのように臨地実習指導体制を変革しようとしているか、③臨地実習における教育の質保証に向けて、どのような支援を必要としているのか、とした。

(2) 専門家会議委員による調査票試案の精練および調査票の完成

専門家会議は、共同研究大学5大学に所属する教員と看護実践研究指導センター教員で構成した。1) で作成した調査票試案を専門家会議で検討し、精練して調査票を作成した。

(3) 調査票を用いた全国調査(web調査)の実施

倫理審査を受審した後、全看護系大学277校の教育責任者に研究協力を依頼し、web調査を実施した。より多くの看護系大学の協力を得るために、調査実施の周知等に関して日本看護系大学協議会の協力を得た。

web調査は、平成31年3月25日に回答を締め切った。92校より回答があり、回答率は、32.5%であった。本年度は、データ集計までを行った。

〔研究2〕臨地実習指導体制をはじめとする学士課程教育の改革に着手している看護大学に対する個別事例研究

(1) 臨地実習指導体制の改革に着手している看護系大学の選定

看護学教育共同利用拠点としてのこれまでのFD支援大学等のネットワークおよび共同研究大学からの推薦により、以下の選定条件に該当する看護系大学を、選定した。

- ・臨地実習体制をはじめとする学士課程教育の改革に着手している
- ・当該大学の教育責任者が、本事業の内容を理解し、研究参加の意思を有する

(2) 専門家会議委員によるインタビューガイドの作成

専門家会議でインタビューガイドを作成した。インタビューガイドは、社会の変化を見据えて、すでに臨地実習指導体制の改革に着手している看護系大学が、①どのようにして、地域社会や学生の変化を読み、新たな実習フィールドを開拓し、新たな実習体制・実習方法を開発しているのか、②臨地実習体制の変革を自大学の学士課程カリキュラムにどのように反映させて、教育を改革しているのか、③教育の成果である到達度評価はどのようにしているのか、④その過程においてどのように各種外部指針を活用しているのか、⑤看護学教育の質保証に関し、どのような課題を有し支援を必要としているのか、を調査項目とした。

(3) 共同大学によるインタビュー調査の実施、インタビュー逐語録の作成

倫理審査等を受審した後、共同大学5大学と本学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターで分担し、(2)で作成した共通のインタビューガイドを用いて、インタビュー調査を実施した。本年度中にインタビューを実施したのは、表2に示す7大学である。現在、インタビューデータの逐語録を作成中である。

表2 平成30年度インタビュー実施大学一覧

大学	設置主体	学士課程 開校時期	地域	1学年定員	臨地実習に 関わる 専任教員数	臨地実習に 関わる助手 非常勤助手数	育成を目指す 看護人材像
A	公立	20年以上前	東北	80-100	20名以上	5名未満	大学所在地に限らず、 全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
B	公立	20年以上前	東北	100-120	20名以上	5名未満	大学所在地に限らず、 全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
C	公立	10-14年前	関東	100-120	20名以上	5-10名未満	大学所在地域の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
D	私立	15-19年前	北陸	80-100	20名以上	20名以上	大学所在地域の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
E	国立	15-19年前	中国 四国	80-100	20名以上	なし	大学所在地に限らず、 全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
F	私立	15-19年前	九州 沖縄	100-120	20名以上	20名以上	大学所在地に限らず、 全国の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職
G	公立	20年以上前	九州 沖縄	80-100	20名以上	5-10名未満	大学所在地域の保健医療（福祉・教育）機関等で働く看護職

3. F D支援

1) 看護学教育ワークショップ

平成30年10月29日(月)～10月30日(火) 千葉大学けやき会館にて開催。

詳細については、6ページをご参照ください。

2) 看護系大学FD企画者研修

(1) 研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が高まっている。毎年約10校のペースで大学の新設が続く中、看護系大学教員には、変化する看護職の役割を踏まえ、看護を学問として体系的に教授する能力が強く求められている。

平成19年の大学設置基準の改正以来、各看護系大学では、すでにさまざまなファカルティ・ディベロップメント(以下FDとする)が行われているが、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合ったFDを体系的に企画・実施・評価することのできるFD企画者養成へのニーズが、ますます高まっている。

そこで、当センターでは、昨年からの新規の事業として、「看護系大学FD企画者研修」を実施している。本研修の目的は、組織分析を通して自大学の課題を特定し、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合った体系的なFDを企画・実施・評価できるFD企画者(FDer)としての能力を身につけることである。本研修では、当センターがこれまでに開発した、「看護系大学におけるFDマザーマップ[®]」およびそれに関連する各種FDコンテンツの活用方法についても学ぶことができるようにし、教員の能力開発を通じた教育の質改善に自立的に取り組む意思のある看護系大学教員を対象とした。

(2) 研修内容

(1) 期 間：以下の3期に分けて実施

研修Ⅰ

平成30年7月22日(日) 10:00～16:00

研修Ⅱ

平成30年8月22日(水)～8月24日(金)

研修Ⅲ

平成31年3月25日(月) 13:00～16:00

(2) 受講者：5大学10名(各大学2名)

(3) 受講料：1名につき15,000円(消費税を含む)

(4) 内 容：研修プログラムを以下に示す。

研修Ⅰ 7月22日(日) 10:00~16:00

時間・場所	プログラム	時間数
10:00~10:10	<ul style="list-style-type: none"> ・センター長挨拶 (吉本) ・オリエンテーション (和住) ・参加者自己紹介 	
10:10~11:30	<p>【FD 企画検討に活用できる当センターからの情報提供】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○FD マザーマップの紹介 (和住 30分) <ul style="list-style-type: none"> ・看護系大学における FD の現状と課題 ・FD マザーマップ活用ガイド Ver. 3 の紹介 ・マップを活用した FD ニーズ特定の例 ○FD マザーマップ対応 FD コンテンツの紹介 (和住・吉本 各 10分) <ul style="list-style-type: none"> ・教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える — 学生への対応に困った 10 事例を通して — ・合理的配慮を要する学生の臨地実習の質保証に向けた FD プログラム開発 ○看護教育・実践連携評価ツールの紹介 (黒田 15分) ○CQI モデル試案と関連各種報告書の紹介 (和住 15分) ○活用できる WEB サイト・資料の紹介 (稲垣 10分) <ul style="list-style-type: none"> ・FD 支援データベース ・センターHP 活用可能な情報・資料 	
11:30~12:30	昼食・休憩	
12:30 ~ 13:20	<p>【自大学の現状を踏まえた本質的 FD 課題の解明】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学ごとに担当教員と討議する。 ・自大学の現状を報告し、参加者間で多面的に分析する。 ・自大学の現状の背後にはどのような FD ニーズが潜んでいるのかについて検討する。 ・午前中の当センターからの情報提供等を参考に、自大学の現状を踏まえた本質的な FD 課題の特定に向けて、他に収集すべきデータがないか検討する。 ・自大学の FD ニーズを踏まえた、実行可能性・有用性のより高い FD 企画するために、研修Ⅱまでに行うべきことを明らかにする。 	5
13:20~13:30	移動・休憩	
13:30~15:10	<p>【全体討議：気づきの共有】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学ごとの課題の整理に関する成果の共有 (1 大学発表 5 分・質疑応答 15 分× 5 大学) 	
15:10~15:20	休憩	
15:20~16:00	<p>【全体討議：FD 企画に向けたさらなる検討】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他大学との意見交換を通して、自大学の FD 企画に向けた課題をさらに明確にする。(司会：和住) ⇒その後、研修Ⅲ日程調整、研修Ⅱオリエンテーション 	

研修Ⅱ 8月22日(水) 10:00~16:40

時間・場所	プログラム
10:00~10:30	【研修Ⅱオリエンテーション】(吉本)
10:40~15:00	【看護学教育指導者研修の参加(講義聴講)】 ・「看護高等教育行政の動向」(杉田(文部科学省)) 昼食・休憩
	【看護学教育指導者研修の参加(講義聴講)】 ・「看護学教育の基礎」(和住)
15:10~16:40	【研修Ⅰ後の進捗状況の報告と研修Ⅱの位置づけの明確化】 (自大学で話し合い、流れ解散)

時間
数

8月23日(木)

9:00~17:00

9:00~10:30 <第二講義室>	【看護学教育指導者研修の参加(講義聴講)】 ・「臨地実習指導の基礎」(黒田)
10:40~17:00	【看護学教育指導者研修の参加(ファシリテーター)】 ・「自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション」 (センター教員、千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他)

15

8月24日(金)

9:00~17:30

9:00~16:45	【看護学教育指導者研修の参加(ファシリテーター)】 ・「臨地実習場面の教材化」 (センター教員、千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他)
16:50~17:30 <184演習室>	【ファシリテーション経験を踏まえて考える自大学の課題解決のためのFD企画】 ファシリテーターとしての経験を踏まえて自大学と臨地実習施設との連携・協働の在り方を含む自大学のFD課題について再検討し、自大学のFDニーズを踏まえたFD計画立案に向けた方向付けを行う。(黒田・銭)

研修Ⅲ (自大学での実践と個別支援・成果報告会)

研修Ⅱ終了後～随時

時間・場所	プログラム	時間数
自大学での実践	<p>【FD企画書の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組織の現状分析を通して、自大学の課題およびFDニーズを特定する。 ・看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に即した、中長期的な計画を含むFD計画を立案する。 ・次年度に向けて、自大学で実行可能なFD企画書（フォーマット提示）を作成し、3月15日までにセンター事業支援係宛に提出する。 <p>※FD企画書の作成までのプロセスは、窓口教員を通じて、当センターからの個別支援を受けることができます。</p>	5

平成31年3月25日(月)

13:00～16:00	<p>【成果報告会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各大学が、現状分析～FD企画書作成までの一連のプロセスについて報告する。 ・修了証書交付 	
-------------	--	--

合計	25
----	----

(3) 実施・評価

1大学2名1組、計5大学10名の定員で受講者を募集としたところ、15大学から応募があり、研修効果が高いと思われる5大学10名を選考して実施した。

研修Ⅰは、FDマザーマップ[®]等の看護学教育の体系的FDに資する情報提供の後、各大学の組織状況とそれに応じたFD企画についてディスカッションを行い、企画立案を課題とした。研修Ⅱは、看護学教育実習指導者研修へのファシリテーター参加形式の演習とし、前後に立案中のFD企画についての実施方略を含めた情報交換を行った。研修Ⅲでは計画、実施、評価の経過報告を行い、FDeRとしての能力開発へのフィードバックを行った。



写真 FD 企画検討に活用できる
当センターからの情報提供



写真 自大学の現状を踏まえた
本質的 FD 課題の解明

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

[自大学・学部・学科等の実情に即した体系的な FD を企画・実施・評価する上で、活用したことや学びになったと思われたこと]

- ・組織として FD をしていく上で、その時々ニーズを単発に企画・実施するだけではなく、自分たち、社会をとりまく状況をしっかりと見る視点、それを踏まえた体系的な FD を企画する必要性を認識することの大切さを学びました。
- ・自大学の現状を網羅的に把握するために、FD マダーマップが活用できそうだと改めて感じました。特定の急を要する課題に対応するだけでなく、長期的な大学の発展に有用と思います。

[本研修への参加によって、所属大学・学部・学科等の教員組織に影響があったと思われたこと]

- ・「大学の将来を決める大切なツールとしての FD」という FD の役割意識を共有できたようで、FD 委員会への期待が一層大きくなったように感じます。
- ・特に教授をはじめ、委員会の長が FD に関して問題意識を持ち、提案をしてくれたことです。また、教員全員で大学の中長期的なビジョンを共有できたと思います。
- ・係ではなく FD を企画する立場にないと思っていたが、「この研修の宿題」であることをその都度伝えながらあらゆる先生方に協力してもらえた。また係でなくても手挙げし、学科に関与し、問題や未来など自由に考え、気づくという機会を提供してよいことも自分の中でプラスになった。
- ・自大学を見直す機会になりました。このことについて、他の先生方も気づいておられました。自大学のよいところを再認識できたと思います。

[本研修に参加した他大学の教員や、他大学の状況から学んだこと]

- ・研修で学んだことを自大学の実情に落とし込む方法。
- ・組織を俯瞰する視点や、自大学の歴史的背景も含めたミッションの共有の重要性。
- ・国立には国立の、私立には私立の課題があることを知った。

(4) 今後の課題

昨年度から開始した研修であったが、今年度も定員を大幅に超える 15 大学以上から応募があり、看護系大学教員の研修ニーズに合致した企画であると評価できる。今年度の参加大学の FD 課題は必ずしも臨地実習に関するものではなかったため、研修Ⅱで、同時開催の看護学教育指導者研修にファシリテ

ーター補助として参加する形式が必ずしもニーズに合っていない可能性もある。次年度の研修より、「看護学教育指導者研修」への参加形態については、自組織の現状、FD企画のニーズに即して、自由に選択できることとし、FDを企画する上で必要な視点を養うこととしたい。

3) 看護系大学への個別支援

- ・私立A大学： 12月19日(水) FDコンテンツを用いたFD研修 講師 和住教授
- ・公立B大学： 12月3日(月) FD研修会への講師派遣の希望があったが、入試日程に重なっており、他の日程や支援方法などを相談中
- ・私立C大学： 2月18日(月) 教育セミナー「FDマップの作成と活用」 講師 和住教授
- ・私立D大学： 2月20日(水) 問い合わせ電子メールにて、FD支援データベースの登録、FD企画へのサポート希望の連絡があり、手続き方法を連絡し、希望するサポートの詳細について問い合わせ中

4. SD 支援

1) 国公立大学病院副看護部長研修

国公立大学病院副看護部長研修は、平成 18（2006）年度から現在に至るまで、当センターの独自事業として実施しており、13 年目を迎えた。研修開催に至った経緯は、国立大学病院看護部長会議からの要請として、大学病院の看護部長をサポートする副看護部長に対し、上級看護管理者としてマネジメント能力向上を図るための研修の必要性が求められたことに端を発する。「国公立大学病院副看護部長の看護管理研修に関わる実践的教育プログラム開発」に関する調査研究の成果を踏まえ、具体的な大学病院の副看護部長研修の実践的教育プログラムが開発され継続して開講されている。

1. 研修目的および目標

研修の目的は、わが国の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者として必要な実践能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることである。

研修の目標は、次の 10 項目である。

- (1) 日本の医療を取り巻く現状を理解する。
- (2) 大学病院における組織のあり方を理解する。
- (3) 人間および人間関係を構造的に把握するための知識を得る。
- (4) 自施設の組織変革に向けた課題を構造的に把握するための方法を知る。
- (5) 自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にする。
- (6) 効果的な企画立案技術を身につける。
- (7) 効果的なプレゼンテーション技術を身につける。
- (8) 自施設の組織変革に向けた課題を抽出し、関連情報の分析を通して実践計画を立案できる。
- (9) 他の医療施設における組織運営の実際を知り、自施設の組織変革に役立てることができる。
- (10) 関連部門の理解と協力を得ながら立案した実践計画を展開し、その成果について事実に基づき評価することができる。

2. 研修の形態および内容

研修の対象者は、国公立大学病院副看護部長とし、副看護部長に就任後経験 2 年以降の者とした。定員は 20 名である。

研修の特徴は、実践力を高めるために、研修期間を以下の 3 期に分けた分散研修方式をとったことにある。集合研修は下記の日程で実施され、10 ヶ月間にわたる。個別プロジェクトのコンサルテーションを含み、受講料は 9 万円である。

研修 1：平成 30 年 5 月 29 日（火）～6 月 1 日（金）4 日間

研修 2：平成 30 年 9 月 4 日（火）～9 月 7 日（金）4 日間

研修 3：平成 31 年 2 月 28 日（木）～3 月 1 日（金）2 日間

各研修の間の期間には、自施設においてより具体的な計画の立案や、その実施および評価を行い、その間にも、センター教員から継続した指導を得ながら、また他の研修生の大学病院を相互に訪問する他施設訪問により、比較検討しながら、実践力を高められるようシステム化されている。

研修の内容は、研修1では、医療政策、医療情報学、組織論・組織分析、教授システム学、医療倫理、病院経営、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅰ）などから構成され、講師は各分野の第一人者および本研究科の教員が担当した。本年度は、地域包括ケアの推進のために日本訪問看護財団理事からの訪問看護に関する講義を実施し、時代のニーズにこたえてプログラムを刷新した。

研修2では、情報収集と分析に関する理論（方法論Ⅱ）、課題抽出・分析演習、企画立案演習、コミュニケーション・人間関係論演習、プレゼンテーション演習等、個人ワークおよびグループワークを組み合わせ、外部研修講師およびセンター教員の指導のもと各自が実践計画の立案を行った。今年度は、センター教員のグループワーク演習の時間を多くとり、各自の実践課題を深めた。

研修3では、実践報告会を行なった。2日間にわたり、全員が自施設で実施した実践計画に基づく実施結果および評価について学会形式で発表を行い、研修生、教員等との質疑応答により内容を深めた。文部科学省大学病院支援室専門官による好評が行われた。報告書は、研修生の同意を得て「教育－研究－実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援データベース」へ登録される。2006～2018年度の累積は250件みられ、ホームページから閲覧できる貴重なデータベースとなっている。

(<http://www.np-portal.com/report/years/>)

研修1



開講式



成人教育と教授システム学/青木太郎先生



情報収集・分析に関する理論/山浦晴男先生

研修2



組織変革のための企画立案/川崎つま子先生



コミュニケーション・人間関係論演習/黒澤泰先生演習



企画立案演習

研修3



成果発表会の様子



修了式：修了証書授与



修了式：宇野光子専門官

3. 研修の評価

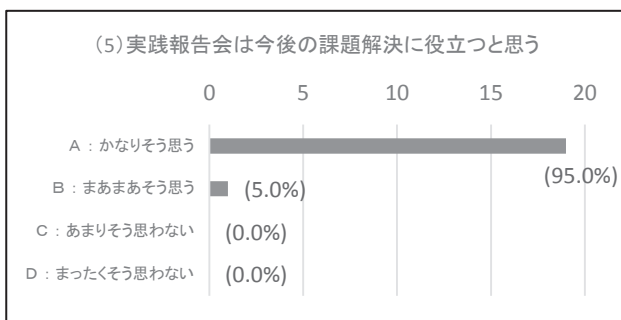
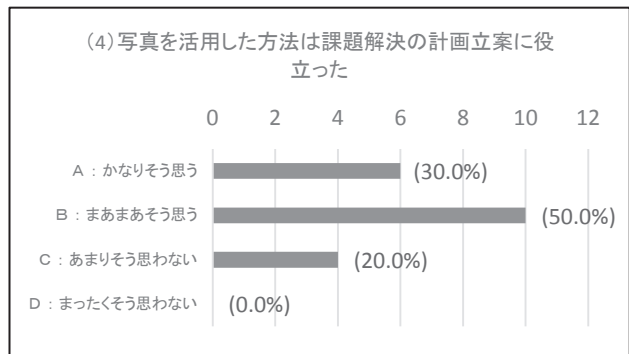
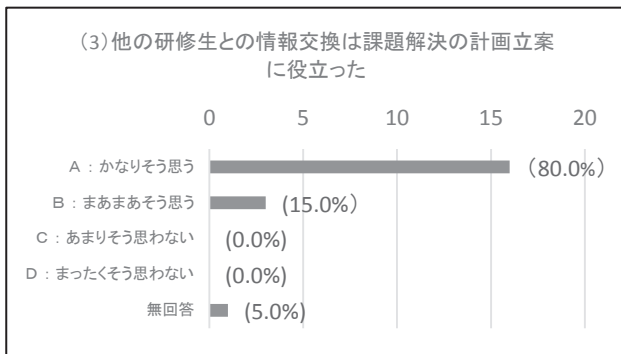
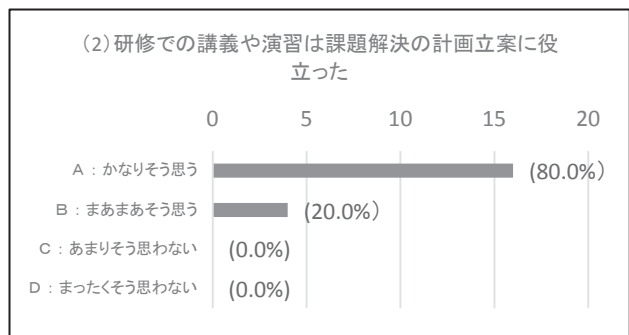
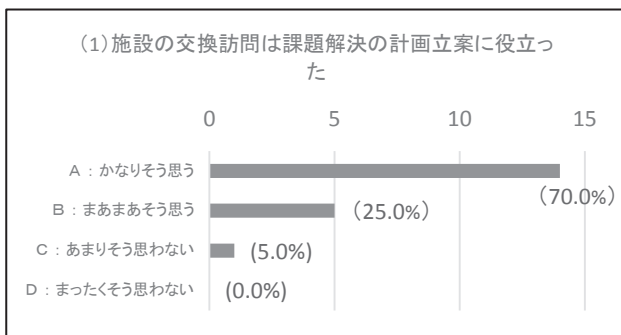
研修の全体評価を、研修3の終了後にアンケートにて実施した。アンケートは、倫理的配慮のうえ、無記名とし回答は自由意思によるものとした。

1) 参加者の背景

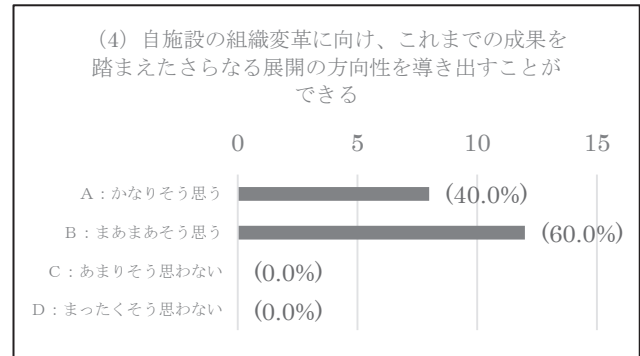
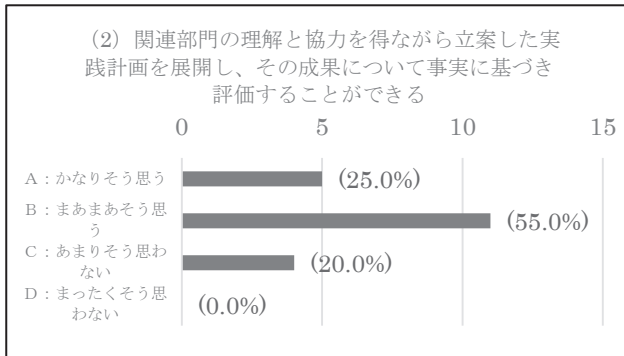
研修受講者は20名のうち、回答のあった受講者は20名であった。所属施設の設置主体は、国立13名、公立1名、私立6名であった。副看護部長経験年数は、平均2年2ヶ月であった。年齢は、40歳代4名、50歳代16名であった。受講動機は、自ら希望が7名、上司にすすめられてが12名、複数回答1名であった。

2) 研修内容について

研修内容について5項目で「かなりそう思う」～「全くそう思わない」の4段階により自己評価を行った。



3) 研修目標の達成について



研修内容の評価では、役に立った項目は、「情報交換」「実践報告会」「他施設訪問」「講義演習」等であった。目標達成状況は、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」を合わせると、8割以上を示していた。全国から集まった研修生との情報交換や他施設訪問、および実践報告会の内容については高い評価が示された。

4. 自由回答欄から

①組織変革に向けた実践報告会の立案時や展開時に必要な支援は、また自施設内での支援体制、教員の支援体制についてのご意見等があれば、

- ・実践計画の立案時には、どのように評価していくのかアドバイスをいただき参考文献を紹介してもらい良かった。そのほか先行研究等の検索の視点のアドバイスをいただけたら助かると思った。展開時は自所属看護部長に時々実践報告しながら勧められた。
- ・施設の情報を細かく確認して頂き、どのように展開していくと効果が得られるかプロセスを追って支援していただきました。
- ・教員に対して一悩んだ時にメール送信しようと思った時はあったが実際には送信まで至らず（考えがなかなかまとまらず）相談までには至らず残念であった。いつでも相談できるという安心感があった。
- ・計画の立案・展開時は自身がどっぷりとその中に入りこんでしまい。客観性に欠けてしまうため、様々な視点（トリの目）での示唆が必要だと感じました。先生とのやりとりでは、取り組む内容や思考の整理をしていただき大変有り難く思いました。
- ・偏りがちな考えを的確に指導して頂き修正することができた。同じグループの研修生とのディスカッションでも考えを整理することができた。自施設の教員の方には研究支援を行ってもらっているが、看護管理においては特に支援はない。
- ・（副部長・部長クラスの）看護管理に関する問題のアドバイザーを依頼出来そうな方が少ないと思います。年間契約できるとよいのですが・・・又は、アドバイザーやファシリテーターがいて、研修生のグループ内で問題解決にとりくめるような研修があるとよい(1回完結の)ものを年に数回とか。

②研修2～研修3を通して学んだことでは、

- ・組織変革に向けた実践計画の立案の際、目的・目標を明確に示し、5W1Hを詳細にしておくことが大切であると学んだ。また、実践の評価をストラクチャー・プロセス・アウトカムで明示しておくことが必要であり自己の課題でもある。実践中に計画外のイベントで中断せざることもあるが、諦めずパッションを持ち続けること、野地先生がおっしゃっていたゆらぎながらベクトルの方向を変えて取

り組んでいくことも大切である。

・この研修を受講し、やるべきことを頭では理解していても自分の中に落とし込まないとやらされ感が強くなると理解できたということは、スタッフも、必要性和意義を伝えることは重要である。副部長として自信がなく過ごしてきたが、この研修を通して何をどうやるべきかを学ぶことができ少し自信を持てた。

・通常の業務を行いながらプロジェクトを進めていくことの難しさを感じた。しかし、まとめることで不足していたこと課題を明確にでき今後につなげることができます。

・他施設訪問での学びを通して課題で取り組んでいる内容だけでなくどのような看護を提供できる組織にしていきたいのかそのためにどのような人材を育成していきたいのかを考え日々の実践につなげることを意識するように、また日々取り組んでいることに意味を持たせることを学ぶことができました。

・課題に応じた他施設訪問を行ったことも非常に良い経験だった。

③新しいプロジェクトを立ち上げる時には、

・組織変革するには強い信念と周囲の連携が必要である。それらの調整等について多くを研修の中で学ぶことができた。施設見学させていただき、大いに参考にさせていただいた。

・[研修2]では、実践していくためのヒントをたくさんいただいたが、毎日の業務に流され、頭の中には必ずあり、時々研修で考えたことなどを実行に移すことで精一杯になってしまった。最終的にまとめるにあたって、評価指標の大切さを強く感じた。他施設訪問が研修の1つとなっていたことはとても意義深かった。他施設での取り組みと自施設での取り組みを比較し何をどうしていけば良いかとても参考になった。背景は違っているが目指しているところは一緒であるため(看護ということでの共通性)この研修の継続を望んでおります。またより発展していくとよいと思いました。

・施設訪問は取り組みのテーマでの訪問内容ではなく、認知症ケアとしての取り組みを見学に行く事ができ、施設の工夫や体制の考え方から患者の目線が同じである事がとても共感でき、自施設の元気をもらえる内容でとても大切なチャンスであり今後活かせるものとなった。

④副看護部長研修全体については

・定期的に全国の方と情報共有ができ自身の取り組みに多くのアドバイスが得られ、とても視野のひろがる研修会でした。

・自己の取り組んでいる課題以外他施設で工夫されていること等情報共有ができて有意義でした。またネットワークができて今後の看護管理活動にも役立つことと思います。このような機会に参加させていただきありがとうございました。

・次期の副部長にも是非進めたい研修の1つです。20名というコンパクトさがとてもよいです。理由は横の連携をつくりやすいし、悩みを共有する事ができ、有意義な研修となりました。ありがとうございました。

・副部長2年目というタイミングで参加して良かったと思います。これからの思考のベースになります。ありがとうございました。

・施設によって状況はさまざまですが、同じようなテーマでも実践の切り口が違ったりすることで、結果への導き方がわかり、多角的な面で捉えるということの面白さを感じました。また、それぞれの取り組みが今後の自施設の改善などの参考になると思います。

平成30年度国公立大学病院副看護部長研修 I 時間割

〔研修 I〕

	I		II	III	IV	V	
	8:50~10:20		10:30~12:00	12:50~14:20	14:30~16:00	16:10~17:40	
5月29日(火)		10:00~ ※開講式 オリエンテーション		組織論・組織分析 慶應義塾大学名誉教授 SFCフォーラム代表理事 花田光世		医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 宇野光子	懇親会
5月30日(水)	医療情報学 京都大学大学院医学研究科 教授 中山健夫			医療安全 日本医療機能評価機構 理事 橋本廸生	看護管理論(1) 公益財団法人 日本訪問看護財団 常務理事 佐藤美穂子	組織変革のための 評価 (看護評価学) 藍野大学学長 菅田勝也	
5月31日(木)	成人教育と教授システム学 日本BLS協会 代表 青木太郎			病院経営(財務管理) 兵庫県立大学大学院経営研究科 教授 小山秀夫		看護管理論(2) NTT東日本関東病院 副看護部長 木下佳子	
6月1日(金)	組織論・組織分析/ 公的病院における エント・オブ・ライフケア 千葉大学大学院 看護学研究科 附属看護実践研究指導センター 教授 野地有子		情報収集・分析に関する理論 (方法論 I) 情報工房 代表 山浦晴男		医療倫理 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 手島 恵	研修 II に向けた オリエンテーション (~17:00予定)	

【受講者の方へ】

- ※初日5月29日(火)は、9:30より受付を行います。
- 初日5月29日(火)に以下のとおり懇親会を行います。
- 時間・・・ 18:00~
- 場所・・・ 附属病院1階カフェ・プロント(予定)

2) 看護学教育指導者研修ベーシックコース

(1) 研修目的

地域包括ケアシステムの構築が進む中、次世代の看護職を育成する上で、地域のさまざまな保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が益々高まっている。本研修は、臨地実習施設等において看護学生の看護実践を直接指導する看護学教育指導者である看護職が必要な能力を高め、臨地と基礎教育機関の連携・協働の充実に資することを目的として開講している。

(2) 研修内容

- (1) 期 間：平成30年8月22日（水）～8月24日（金） 3日間
- (2) 内 容：時間割を表1に示す。
- (3) 受講者：38名
- (4) 受講料：30,000円（消費税を含む）

表1 平成30年度 看護学教育指導者研修（ベーシックコース）時間割

日 時	I	II	III	IV	
	9:00～10:30	10:40～12:10	13:30～15:00	15:10～16:40	
8月22日 (水)	9:30～ 開講式 オリエンテーション	看護高等教育行政 の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官 杉田由加里	看護学教育の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科 教授 和住淑子	看護における 成人教育のあり方 埼玉県立大学 保健医療福祉学部 看護学科教授 鈴木康美	
8月23日 (木)	臨地実習指導の 基礎 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子	自組織の現状を踏まえた指導過程のリフレクション (17:00 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他			
8月24日 (金)	臨地実習場面の教材化 (16:45 終了) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教員 千葉県立保健医療大学教授 河部房子 他				17:00～ 閉講式

(3) 実施・評価

初日は看護高等教育行政の動向、看護学教育の基礎、看護における成人教育のあり方を学び、2日目からはグループワークを行い、上手くいかなかった教育指導実践の事例をいかに教育のチャンスとして教材にしていくかをグループで検討、その検討結果を使ってロールプレイングを行いながら学びを深めた。

今年度も、昨年度に引き続き、訪問看護ステーションからの参加者があった。医療機関の看護職とは異なる視点や学生指導の経験がグループワークを活発にしていた。地域包括ケアシステムの構築に伴い、今後はさらに医療機関以外での臨地実習が増加することが予測される。多様な臨地実習施設の指導者にとっても、本プログラムでの研修が有用であることがわかった。

また、「看護系大学FD企画者研修」の参加者にもグループワークに参加してもらい、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働の機会とした。



写真 講義の様子



写真 グループワーク・ロールプレイングの様子

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・ 38名全員からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の職位は、スタッフ看護師19名、副師長（主任）19名、看護師長1名であった。
- ・ 年齢構成は、20代4名、30代21名、40代11名、50代2名であった。
- ・ 項目別の評価結果は、図1に示した。全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、7割以上であった。
- ・ 自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。

「看護学生が増えてきている分、看護の質を担保するために、臨地実習はとても大事であること、成人学習者への関わり方など、今回学んだことを病棟スタッフへ伝えていくという自身の役割を認識した。」

「実習指導することの意義は、学生さんの学びのためだけではなく、臨床で行われている看護の見直しや新たな気づきにもつながることもあるというのは学びとなった。学生さんの特性をとらえて、学習目標を達成できるような関わり方、指導の方法について

て学ぶ機会は多くないのでとても勉強になった。」

「学生は卒業と同時に看護師、社会人になるがそこで経験や体験が途切れる訳ではない。看護学生のと看にどのような学びを得てきたか、患者との関わりで看護の原体験となるものを必ず持っている。そのときの体験をひき出し、どのような看護を目指しているか1つ1つ聴きながら看護師としての経験を積み重ねられるようにしたい。」

「今回自己の目標として、学生が実習において充実感を持ち、成功体験として経験が積める様な指導が出来るとして参加、受講させていただきました。学生と臨床のギャップをうめ、効果的な振り返りが出来る様今後も積み重ねて行ければ良いと感じ充実した研修でした。」

「学生実習の構造を理解し、支援の体制について関係職種と事前に具体的なところまで役割調整をしておくことが必要となることを学びました。実習指導者に求められている役割や知識について院内研修で共有していきたいと思ひます。」

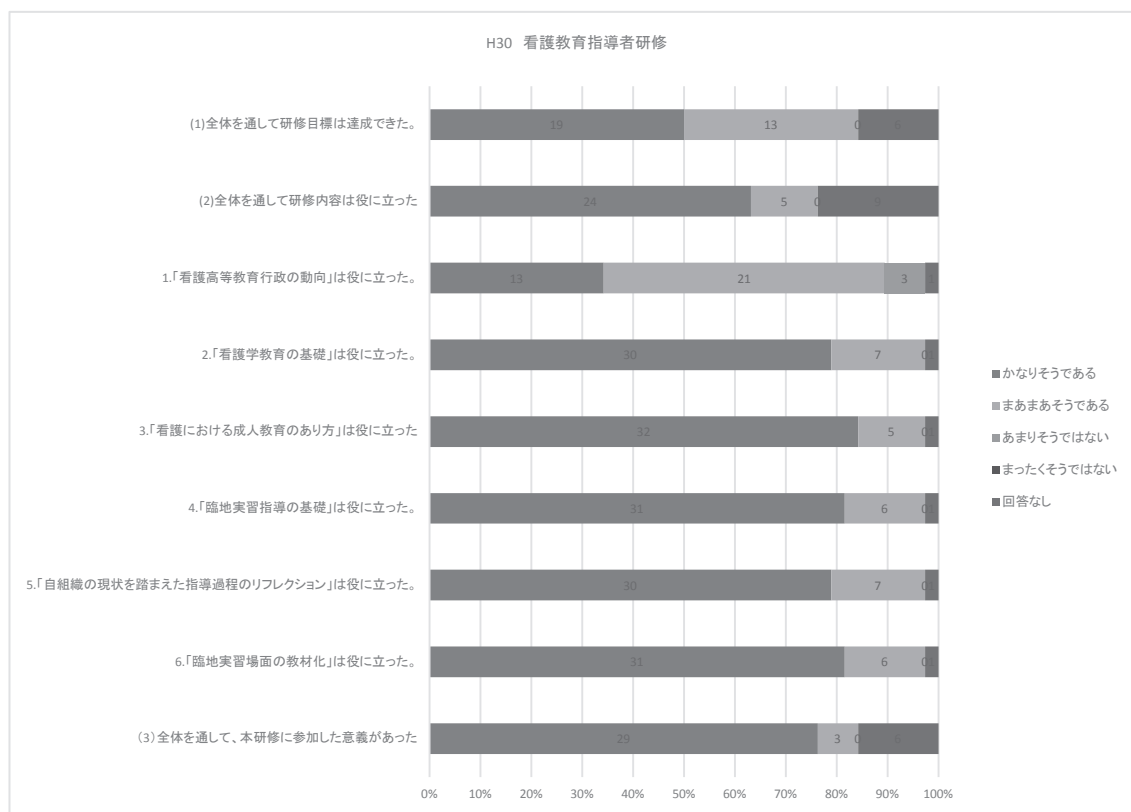


図1 終了時の研修評価アンケート結果

(4) 今後の課題

受講者からは「グループワークが非常に楽しくあっという間だった。その上普段経験しない立場から感情を考えることができたので良い気づき、学びになった。今後もこの方法は有用だと思います。」という意見が多くあり、演習を主体とした本研修は、臨地実習指導者としての力量を高める上で有用と考える。しかし、グループワークの前に受講者自身の経験をワークシートに書いてもらうのにやや時間がかかっていた受講者もいたため、今後は、記載例を示すなど、さらなる工夫が必要であると思われる。

3) 看護管理者研修ベーシックコース

(1) 研修目的

近年の医療制度改革では、住み慣れた地域で生活できるための医療への転換を目指して、病床機能分化が進められている。特に、急性期病院では、限られた在院日数で効果的に医療を提供し、速やかに地域での生活に戻ることができるよう支援する役割が求められている。本研修は、看護師長等現場の看護に責任を持つ職位にある、国公立大学病院をはじめとする急性期病院の看護管理者が、医療提供体制の変化に対応した複雑かつ重要な課題を組織的に解決する能力を開発することを通して、看護本来の役割発揮を支援することを目的として開講している。

(2) 研修内容

- (1) 期 間：平成30年9月26日（水）～9月28日（金） 3日間
- (2) 内 容：時間割を表1に示す。
- (3) 受講者数：102名
- (4) 受講料：30,000円（消費税を含む）

表1 平成30年度 看護管理者研修（ベーシックコース）時間割

		I	II		III		IV	
		9:20～10:50	11:00～12:30		13:40～15:10		15:20～16:50	
9月26日 (水)		9:30～ 開講式 オリエンテーション	急性期病院をめぐる 医療政策の動向 文部科学省 高等教育局医学教育課 大学病院支援室専門官 宇野光子		昼 休 憩	学びの 確認と 共有	医療経営管理 奈良県立医科大学 教授 今村知明	看護行政の動向 厚生労働省 医政局看護課課長補佐 後藤友美
9月27日 (木)		9:20～11:30			12:40～14:10	14:25～17:30		
	学びの 確認と 共有	看護管理における データ活用 の方法 千葉大学医学部附属 病院地域医療連携部 特命病院教授 小林美亜	昼 休 憩	学びの 確認と 共有	看護管理におけ る研究の活用 慶應義塾大学 看護医療学部教授 深堀浩樹	看護管理実践のリフレクション (演習) 千葉大学大学院 看護学研究科准教授 黒田久美子		
9月28日 (金)		9:20～10:50	11:00～12:30			13:40～15:10	15:20～16:50	
	学びの 確認と 共有	特別講義 今、日本の看護職に求 められること 東京医療保健大学 副学長 坂本すが	人材育成と キャリア開発 千葉大学大学院 看護学研究科教授 和住淑子		昼 休 憩	学びの 確認と 共有	地域包括ケアシステム における急性期病院の 役割 在宅ケア移行支援研究 所宇都宮宏子オフィス 宇都宮宏子	

(3) 実施・評価

今年度は、昨年度の評価を踏まえ、新たな試みとして、自施設の状況や受講者自身の問題意識を重ね合わせて講義を聞くことができるよう、各講義の前後に学びの共有と確認の時間を設け、参加者同士の交流の時間を設定した。

総勢9名の多彩な講師陣で構成された講義では、少子高齢社会における人々の健康と生活の充実のために、いかに現場の看護管理者の役割発揮が重要であるかを再認識するとともに、全国の看護管理者間の良いネットワークの形成ができた。



写真 講義の様子



写真 演習の様子

研修終了時に実施した、受講者による研修評価アンケート結果の概要を以下に示す。

- ・ 102名からアンケートを回収した。
- ・ 受講者の年齢構成は、30代4名、40代52名、50代45名であった。
- ・ 項目別の評価結果は、図1に示した。全ての項目で、「かなりそうである」、「まあまあそうである」の合計が、8割以上であり、特に「特別講義」の評価が高かった。
- ・ 自由記載欄の主な記述は以下のとおりである。

「地域の中で自施設が求められている機能をしっかりから見極め、やりたい医療をするだけの病院では成立しないことを再認識しました。果たすべき役割の中で最良の医療を提供するためには病院はつぶれてはいけない、そのための策を考えていくヒントをたくさん学びました。」

「現状や新しい情報に踊らされるのではなく、問題意識をもち高い視点で物事を捉える事、情報や数字をそのまま受け入れるのではなく、その情報や数字をどう利用するか役立てるかが重要である事を学んだ。」

「先見性を持ち行動化する。そのためには根拠となる客観的なデータを活用する等、改めて再確認する機会となりました。しかしその本質は看護『看護』の思考であると思いました。看護の思考を深めるためには、いかに教育的な関りが大切であるのかを一番の学びと感じ取りました。」

「自分のビジョンをもつこと。またスタッフ自身のビジョンも大切にすること。スタッフがビジョンを達成するように支援していくことが管理者としての役割がある。自分の立ち位置はどこか？10年先はどうなっているのか現在のデータから生かしていくことは何かと考え、スタッフを先導していく必要がある。」

目先のことばかりでなく、未来をみすえて頑張ります。」

「・日本が抱える問題、それに伴う看護。大きな視野でとらえる必要性を学び、社会の動向を考えながら自施設での問題に目を向け、取り組んでいく必要があると改めて感じた。」

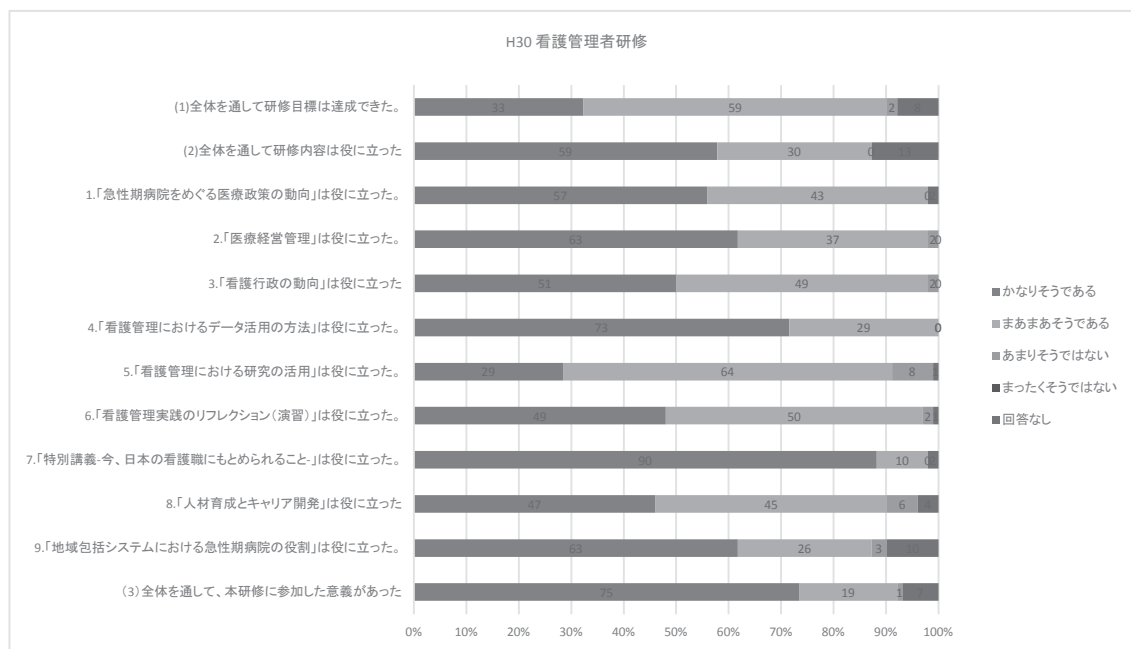


図1 終了時の研修評価アンケート結果

(4) 今後の課題

昨年度の研修評価アンケート結果を踏まえ、今年度は、新たな試みとして、自施設の状況や受講者自身の問題意識を重ね合わせて講義を聞くことができるよう、各講義の前後に学びの共有と確認の時間を設け、参加者同士の交流の時間を設定した。このことについては「まなびの共有はみんなの思いが聞けてよかったと思う。」という感想が多かったが、中には、「会場が広がった事もあり、参加者との意見交換や講義を受けての感想など言葉を交わす人が限られている。時間的な制約もあるだろうが意見交換できる時間があればよかった。」等の意見もあった。

今後は、集合型の研修のみならず、参加者間の意見交換や交流の場をもつような研修形態を検討する必要があると考える。

5. 共同研究

■共同研究1

「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える

看護学教員向けFDコンテンツの開発と評価」

1. 研究組織

山本 真実	(岐阜県立看護大学・講師)
高島 尚美	(関東学院大学看護学部・教授)
飯岡 由紀子	(埼玉県立大学・教授)
和住 淑子	(看護実践研究指導センター・教授)
黒田 久美子	(看護実践研究指導センター・准教授)

2. 研究概要および研究経過

1) 「看護学教育におけるFDマザーマップ®」とは

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成23～27年度にかけて、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトに取り組み、「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を完成させた。

「看護学教育におけるFDマザーマップ®」は、看護学教育の特質を踏まえた看護系大学教員に求められる能力が、**〔基盤マップ〕〔教育マップ〕〔研究マップ〕〔社会貢献マップ〕〔運営マップ〕**の5つのマップに体系的に配置され、教員の能力レベルは、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」という3段階に区分されている。(http://fd.np-portal.com/)

2) FDコンテンツの開発

「看護学教育におけるFDマザーマップ®」を実際に活用した大学からは「必要とされる能力が体系的にまとまっていてよい」「自大学のFDを見直す良い機会になる」等の評価を得た一方で、「実際にFDマザーマップ®をどのように活用すればよいのか」「具体的にはどのようなFD企画を立案すればよいのか」といった戸惑いの声も聞かれた。FDマザーマップ®の開発と同時に作成した「看護学教育におけるFDマザーマップ®活用ガイド」ではFDマザーマップ®の活用例を紹介してきたが、看護学教育の現場では、より具体的、実践的なFDツールが求められており、FDコンテンツ開発の必要があることがわかった。

3) 開発したFDコンテンツ

本プロジェクトでは、看護系大学教員として、日々の学生との関わりの中で、どのように対応したらよいか、困る場面に着目して開発した。一般に、このような状況に直面した場合、その対応は、教員個人に任されているが、教員間で対応が食い違ったり、後から組織的な問題に発展したりすることもある。つまり、対応に困る状況に対する個々の教員の

反応は、その教員個人のもつ教育観の現われであり、また、それだけではなく、組織のあり方にも影響を受けているといえる。

そこで、本FDコンテンツは、日々の学生との関わりの中で、教員が対応に困る典型的な場面を10事例とりあげ、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えることを目的に開発した。この成果は、平成28年度に報告書としてまとめ、全国の看護系大学及び関係機関に配布した。

〔報告書〕看護学教育研究共同利用拠点、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、「教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教員向けFDコンテンツ開発と評価」プロジェクト研究共同研究員。和住淑子，黒田久美子，高島直美，飯岡由紀子，山本真実：「看護学教育におけるFDマザーマップ®」対応型FDコンテンツ開発報告書，教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考えるー学生への対応に困った10事例を通してー，1～48，2017年3月

4) 開発したFDコンテンツの活用状況

平成29、30年度の2年間にわたり、実際に本FDコンテンツを活用してFDを実施した看護系大学が1校あった。具体的な活用状況は、事例集から大学の実情に即した事例を選択し、事例の提示する問題状況に対する教員としての自身の考えや対応について、グループ討議を行う、というものであった。企画者らが実施した事後評価アンケートでは、参加者から良い評価が得られていた。

5) 本コンテンツに関する今後の研究計画の検討

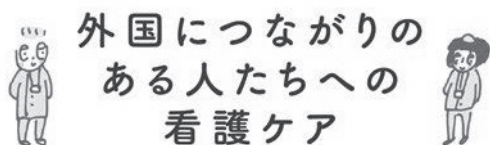
本FDコンテンツを活用してFDを実施した看護系大学の実績を踏まえ、平成30年度は、本FDコンテンツに関する今後の研究の方向性を検討した。FD企画者は、自大学の実情に即して、研修効果の期待できそうな事例を選んで活用していたが、組織の状況を踏まえると、効果的なFDとするためには、組織の実情に即した運用方法への支援が必要であることがわかった。そこで、次年度は、FD企画者に対し、FD運営に関して配慮したことなどについてインタビューを行い、本コンテンツの運用に関する研究計画を立案することとした。

■共同研究 2

「看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する実証研究」

1. 研究組織

- 大友 英子 (東京大学病院・看護師長)
西山 正恵 (杏林大学保健学部看護学科・特任教授)
池袋 昌子 (茨城キリスト教大学看護学部・准教授)
坂元 眞奈美 (鹿児島大学病院・副看護部長)
相原 綾子 (獨協医科大学看護学部・助教)
望月 由紀 (東都医療大学幕張キャンパスヒューマンケア学部・准教授)
炭谷 大輔 (千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
近藤 麻理 (関西医科大学看護学部・教授)
小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
溝部 昌子 (西南女学院大学保健福祉学部・教授)
浜崎 美子 (康生会武田病院・看護部長)
別府 佳代子 (国立国際医療研究センター・救命救急センターコーディネーター・幹部候補)
野地 有子 (千葉大学大学院看護学研究科・教授)



2. 研究の概要

本プロジェクト研究は、平成 25 年度より開始された継続プロジェクトである。国際的な医療環境の変化を受け、病院の国際化はアジア諸国では急速に進展がみられるが、日本は立ち遅れている。外国人患者や看護師を受け入れている病院も多いが、言語、生活習慣、価値観、社会背景の違いに対する戸惑いが多く、よい看護を提供しても誤解が生じ医療事故も危惧され、病院における看護職の文化的能力の教育と環境整備が急務である。2020 年東京オリンピック・パラリンピックに加えて、2025 年には大阪・関西万博の開催が決まり、ますます、看護職の多文化対応能力の向上が求められてきている。そこで、本研究プロジェクトでは、これまでの本研究班による基礎データを基に、看護職の多文化対応能力を開発するための教育モジュールの開発と臨床応用を中心に進める。

3. 本年度の成果

1) 看護職の多文化対応能力を開発するための教材開発と評価

看護職の多文化対応能力を開発するための教材を開発し評価した。研究班の実施した調査データを用いて、「外国につながるある人たちへの看護ケア：異文化との出会い 42 病

院マップ編」をまとめ、しおり 2018 としてイラストを用いた印刷物とした。評価は、第 22 回日本看護管理学会（神戸）インフォメーションエクステンジにおいて、71 名の参加を得て共同研究員がグループファシリテータとなって活用評価を行った。加えて、2 病院、1 看護大学、1 保健所管内において、マップの活用についてワークショップを実施し（162 名）倫理的配慮のうえ無記名自記式アンケートを行った。イラストを用いたマップの活用効果が示唆された。

2) 看護職の多文化対応能力を開発するための教育モジュールの開発

教材開発と平行して、看護職の多文化対応能力を開発するための教育モジュールの開発を進めた。ベーシックコース、アドバンスコース 1、アドバンスコース 2 の 3 段階の構造とした。ベーシックコースには 5 つのモジュールが開発され、①インバウンドとヘルスケア、②社会的背景とカルチュラル・コンピテンス教育の必要性、③外国につながりのある人たちへの看護ケア（当研究班で開発したオリジナルの教材を使用）、④コミュニケーション演習、⑤倫理事例演習から構成される。



ベーシックコース
QR コード

3) 2 つの国際セミナーの開催

海外との比較検討および国際共同研究として発展させるために、2 つの国際セミナーを開催した。2018 年 5 月に実施した、米国および台湾における看護職の異文化対応能力セミナーでは、米国ワシントン大学名誉教授 Noel Chrisman と台湾成功大学教授 Mei-Feng Lin のお二人より長年の研究からお話いただいた。2019 年 3 月には、本学が海外キャンパスを展開するドイツのシャリテ医科大学より、Judith Heepe 看護部長を招聘し、ドイツの看護やヨーロッパ最大規模の 3,000 床のシャリテ医科大学病院における多文化対応能力のスタッフ教育等についてお話いただいた。移民を受け入れるドイツでは、外国人看護師の課題もあげられた。社会実装に向けた研究を継続し、我が国の看護職のカルチュラル・コンピテンスが病院などの組織の核となることを目指す基盤的研究成果を得た。



図 1 米国および台湾における看護職の異文化対応能力セミナー



図 2 グローバルヘルス国際セミナー
シャリテ医科大学

4. 次年度の計画

これまで蓄積されたデータおよび知見、教材開発や研修開発をすすめ、臨床および教育における活用と環境整備のための政策提言等を行い、看護国際化のガイドラインづくりを行う予定である。

■共同研究 3

「公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発」

(ELNEC: End of Life Nursing Education Consortium)

1. 研究組織

- Roger Strong (サンディエゴ大学・特任教授
サンディエゴ退役軍人病院・看護管理者)
- 近藤 麻理 (関西医科大学看護学部・教授)
- 相原 綾子 (獨協医科大学看護学部・助教)
- 小寺 さやか (神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
- 谷井 真弓 (東京大学医科学研究所附属病院・看護師長)
- 野地 有子 (千葉大学大学院看護学研究科・教授)

2. 研究の概要

本プロジェクトは、エンド・オブ・ライフ看護学への関心の高まりを背景に、センターの大学病院看護管理者への研修プログラムの特徴を活かして、公的病院における本テーマに関する教育プログラムの検討を行うために開始したプロジェクトであり、昨年度に続き継続している。米国の ELNEC 開発のメンバーである、Dr. Roger Strong を共同研究員に迎え、米国本部より ELNEC 指導者の認定を受けた共同研究員からなるプロジェクト研究員の構成であることから、ELNEC 教育プログラムを中核に置いた。

3. 本年度の成果

本プロジェクトの共同研究員である Strong 博士は、30 年にわたる緩和ケアでの臨床実践と研究および ELNEC を通して米国内はじめ国際的にエンド・オブ・ライフケアの教育に尽力されている。豊富な経験と知見を踏まえ、本プロジェクトに ELNEC の教材の最新版の提供ならびに、助言がなされた。教材の使用許可は得ている。昨年度、本共同研究班では、コンテンツ事例集の編纂を行い、米国 ELNEC 本部の許可を得て冊子の発行を行った。そこで、本年度は、千葉大学の「普遍教育 生きるを考える」の授業において本冊子を用いて授業を提供し、使用後の学生のレスポンスシートから学生の同意を得た上で、教材としての検討を行った。8 回構成の中の、1 回が「文化を考慮にいたした医療と EOL (ELNEC から)」の 90 分授業である。参加者は本学の学生 205 名のうち、レスポンスシートを提出した 140 名であった。

ELNEC について初めて知った者がほとんどであったが、名前を聞いたことがある者も若干名みられた。教材は事例集であったので、具体的に考えをすすめることができたと述べる者が多くみられた。また、「様々な事例について学び、ELNEC がどのような医療を目指しているのか学んだ」という感想もあった。希望としては、事例を用いて、学生同士の意見交

換の時間や、グループワークの時間が欲しかったという意見がみられた。今後の発展につながる意見には、「今後 ELNEC は医療業界において大きな意味をもつ教育プログラムになるだろうと思った」や、「人の痛みや苦しみを取り除くことに尽力するだけでなく、人の育ってきた文化圏や宗教に対しての考慮もしっかりしていこうとする姿勢に対して深く感銘した。人間の長い歴史において文化の違いや宗教の違いは一度も相いれることはなかったが、現代の医療の分野においてそれが成し遂げられようとしていることが私にとってはすごいことのように感じた」などの意見がみられた。多様な学びの意見がみられており、コンテンツ教材を活用した者の意見を参考に、教材の内容および活用方法の検討をすすめることができた。

4. 教材用いた ELNEC 事例

コンテンツ教材には、9 モジュール 37 事例が含まれている。今回の授業で用いた事例は、モジュール 5 「エンド・オブ・ライフケアにおける文化的・スピリチュアルな配慮」の中のケーススタディ事例 1 「李氏」であった。

次年度の計画

地域包括ケアの推進とも連動して、公的病院における ELNEC 教育プログラムの開発について、多文化対応能力の開発との関係から継続して進める。

■共同研究 4

「FD コンテンツ開発（国際）」

－ 10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進 －」

1. 研究組織

近藤 麻理	(関西医科大学看護学部・教授)
小寺 さやか	(神戸大学大学院保健学研究科・准教授)
溝部 昌子	(西南女学院大学保健福祉学部・教授)
相原 綾子	(獨協医科大学看護学部・助教)
炭谷 大輔	(千葉大学大学院看護学研究科・特任研究員)
野崎 章子	(千葉大学大学院看護学研究科・講師)
野地 有子	(千葉大学大学院看護学研究科・教授)

2. 研究の概要

本センターで開発した、看護学教育のためのFD マザーマップの活用推進のためのコンテンツ開発を目的とした。本プロジェクトチームは、国際交流推進のためのコンテンツに取り組んだ。FD マザーマップの位置づけは、教育マップ2-6「学生支援」の中の「国際交流の推進」を中核とした。本年度で3年継続している共同研究プログラムである。

3. 本年度の成果

「看護学教育におけるFD マザーマップの開発と大学間共同活用の推進 平成30年度 看護学教育FD マザーマップ・コンテンツ開発 10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書 Vol.3」を発行した。

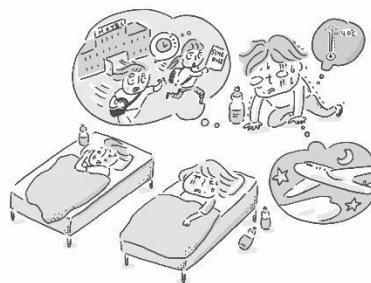
本報告書のコンテンツ開発は、3段階で行った。第1段階は、海外研修危機管理シミュレーションに関する参考資料・ウェブサイトの情報更新、第2段階は、海外派遣および受入れ時の安全管理に関する出来事レポートの書式を作成し、開発委員らが実際に体験した事例を、この様式を用いて出来事レポートにまとめた。また、コラム事例もイラストを活用して作成した。第3段階では、看護基礎教育における、異文化対応能力に関する教育の実際についての検討例をあげた。

事例は次の7事例であった。

- 事例1. 到着日の携帯電話の落とし物
 - 事例2. 深夜便の移動と高熱
 - 事例3. 学生の現地における突然の体調不良（1）
 - 事例4. 学生の現地における突然の体調不良（2）
 - 事例5. 現地の研修先クリニックの受診
 - 事例6. 引率教員の現地における体調不良
 - 事例7. 帰国日の現地空港クリニックの受診
-



事例1のイラスト



事例2のイラスト

4. 次年度の計画

FD マザーマップを活用した「国際交流に関するFD ニーズ」の高いことから、継続してコンテンツの開発と充実をすすめる予定である。



■共同研究5

「合理的配慮を要する学生の臨地実習にむけたFDプログラム開発」

1. 研究組織

飯岡由紀子（埼玉県立大学大学院研究科・教授）
遠藤和子（山形県立保健医療大学保健医療学部・教授）
小川純子（淑徳大学看護栄養学部・准教授）
松岡千代（佛教大学保健医療技術学部・教授），
吉本照子（看護実践研究指導センター・教授）

2. 共同研究の背景

2016年4月、障害者差別解消法及び改正障害者雇用促進法の施行により、障がいをもつ学生各々の状況に応じた「教育上の合理的配慮（合理的配慮）」のもとに学生の学修機会を保障することがもてられている。さらに教育現場では、本人の自覚がない、あるいは障がいの有無が明確ではない学生への修学支援ももてられる。看護学教育における臨地実習では、実習施設の患者・家族、実践者および学生全員の安全・安心を確保し、実習施設の看護の質、および他の学生の教育の質保証等も考慮して合理的配慮を含めた修学支援を行う必要がある。こうした多様な要因を学生の個別性に即して調整し、学生全員の実践力の到達目標の達成、およびキャリア発達を支援するには、教員および実践者の教育能力の開発(FD)、新たな教育方法の開発や専門的な支援体制の構築が必要である。しかし、臨地実習における合理的配慮の考え方あるいは教育方法に関する報告はまだ少ない。

そこで、看護系大学に共通する教育の課題として、2015年度から4大学の教員とセンター教員が協力し、FD マザーマップ対応型のFDプログラム開発に取り組むこととした。

3. 研究状況

2017年度の「FD マザーマップレベル(レベル)」Ⅰ「合理的配慮を必要とする学生および支援方法に関する理解」、レベルⅡ「個別事例への教育実践力強化」のFDプログラム試案の実施、評価および精錬をもとに、より多くの看護系大学における活用の推進に努めた。学会発表とともに、広報のためのチラシを作成し、センターの2018年度FD企画者研修、看護学教育ワークショップ等で配布した。雑誌連載（看護教育、58(1)－58(12)、2017）の読者、看護学教育ワークショップ参加者等を通して4機関から依頼があり（2015年以降の累計12機関）、各機関のニーズおよびFD企画に沿って実施した（表1）。いずれの機関も合理的配慮に関する理解を深め、ワークシートの活用により、教員と学生を取り巻く状況を多面的に捉えることができ、本FDプログラムの有効性と実用可能性を確認した。

2017年度に続いて、多様な看護学教育分野の臨地実習における合理的配慮を含めた修学支援の事象の構造について、教員の困難感と対処、およびその関連要因に関する面接調査・質的分析を行った。また、合理的配慮を含む修学支援に関する体制や課題等に関し、全大学を対象に質問紙調査を実施し、分析した。さらに、レベルⅢ「臨地実習における合理的配慮を含めた修学支援に関する組織的支援の保証」の内容を考案し、研究組織外のセンター教員2人とともにFD マザーマップ対応型FDプログラムとしての内容妥当性について検討した。

なお本研究は、JSPS 科研費 JP16K15888（研究代表者：飯岡由紀子）の助成、および本センター予算にて実施した。

表1 開発したFDプログラムの活用

実施年月	実施機関	標題	FDマザーマップレベル		対象者	参加人数 (人)
			I	II		
2018年7月	A看護協会	「教育上の調整が必要な学生の学びにつながる対応ー臨地実習での対応を中心に」	○	○	看護専門学校教員等	17
2019年1月	B大学	「臨地実習において配慮が必要な学生への教育上の調整ー学生の学びにつなげる対応とは～」	○	—	臨床指導者	47
2019年2月	C大学	「教育上の調整が必要な学生の学びにつながる対応ー臨地実習での対応を中心に」	○	○	教員(看護学科、臨床検査学科)	30程度
2019年2月	D大学	「実習において教育上の調整が必要となる学生への学びにつながる対応について考える」	○	○	教員・臨床指導者	45程度

学会発表

- 1) 飯岡由紀子, 松岡千代, 小川純子, 遠藤和子, 吉本照子: 「臨地実習において配慮が必要な学生に対するFDプログラムレベル2の試行と評価. 日本看護学教育学会第28回学術集会プログラム・講演集, 145, 2018.
- 2) 小川純子, 遠藤和子, 飯岡由紀子, 吉本照子, 松岡千代: 臨地実習において配慮が必要な学生への教育上の調整. 第38回日看科会学術集会電子抄録, 2018.

「配慮が必要な学生への教育上の調整」出張FD・SDプログラムのご案内

FD・SD活動をサポートします！

飯岡由紀子(埼玉県立大学)、吉本照子(千葉大学)
松岡千代(福井大学)、小川純子(誠徳大学)
遠藤和子(山形県立保健医療大学)

臨地実習は、臨床の厳しさを実感しながらケアの重要性を考えられる統合的な学びの場として、学生にとっても、看護教員や臨床指導者にとっても重要であり、実り多い学びになるよう尽力されていることでしょう。近年、発達障害傾向のある学生や、精神疾患や障害のある学生が増加しています。そのような学生への実習指導において次のような悩みを抱えていませんか？

- ◆ どのように対応したらいいの？
- ◆ 患者の安全を保ちつつ実践の体験を増やすにはどうしたらいい？
- ◆ 同じことの繰り返しだけど、学生の学びにつなげるにはどうしたらいいの？

これらの課題に向き合い、より効果的に対応するためにFD・SDプログラムを開発しました。ご希望がありましたら、出張FD・SD行います。

- 合理的配慮とは
- 臨地実習で教員(臨床指導者)が抱く困難感
- 大人の発達障害の特徴と対応
- 教育上の配慮
- グループワーク(事例討議)
- ラウンドテーブルによる共有
- 組織的な取り組み
- キャリア支援

障害と合理的配慮に関する理解の促進

臨地実習における教育上の調整

自大学の課題と発展

状況により、FDプログラムのアレンジを行います

【問い合わせ先】
埼玉県立大学 大学院研究科 飯岡由紀子
〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮820番地
Tel 048-971-0500 (代)
e-mail iioka-yukiko@spu.ac.jp

広報用チラシ

■共同研究 6

「組織の現状を踏まえた研修企画を支援する方法の開発」

1. 研究組織

- 杉原 多可子 (社会医療法人純幸会 関西メディカル病院・看護部長)
鈴木 康美 (埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科・教授)
西山 ゆかり (四條畷学園大学・准教授)
三谷 理恵 (神戸大学大学院保健学研究科・助教)
室屋 和子 (佐賀大学医学部看護学科・准教授)
和住 淑子 (看護実践研究指導センター・教授)
黒田 久美子 (看護実践研究指導センター・准教授)

2. 研究概要と研究経過

1) 本研究組織によるこれまでの各種研修プログラム開発の実績

①「新人看護師教育担当者能力自己評価票」

- ・〔原著〕「新人看護師教育担当者能力自己評価票」(SS-CNE) Ver. 1 の信頼性・妥当性の検討. 日本看護管理学会誌, 受理日 平成31年2月15日 (印刷中)

②自施設完成型新人看護師教育担当者育成プログラム

- ・〔資料〕新人看護師教育担当者育成モデルプログラムの開発と試行. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 34, 45-50, 2012.
- ・数施設からの活用許諾の申請あり。

③新人看護師教育責任者支援プログラム

- ・〔学会発表抄録〕新人看護師教育責任者支援プログラムの開発-自施設の評価をふまえた研修企画能力向上への支援-. 第20回日本看護管理学会学術集会抄録集, 347, 2016.
- ・開発したプログラム内容は次ページ表参照
- ・都道府県職能団体の主催する「新人看護職員研修責任者研修」にて使用 (平成27～29年度) 他

2) 今後の研究計画の検討

上記実績を踏まえ、平成30年度は、今後の研究の方向性を検討した。新人看護師教育責任者は、自組織の分析が不十分なまま、新しい教育方法を導入しようとするなど、支援が必要な状況は依然として続いているが、その課題がはっきりしていないことがわかった。そこで、次年度は、本共同研究にて開発した「新人看護師教育責任者支援プログラム」の実施前、実施中、実施後の評価を含む研究を計画することにより、看護管理者が自組織の現状を踏まえた効果的な研修企画を立案するための支援方法を開発することとした。

目標：研修責任者として役割を理解し、新人看護職員研修企画・運営・実施・評価に必要な知識を学び、自施設の系統的な研修プログラムの策定及び企画の能力をつける。

対象：施設の新人看護職員研修の研修責任者の役割を担う者、またはその予定のある者

月日	時間	研修内容
1 日目	9:30～10:45	講義 1 新人看護職員研修の企画の基本的考え方 ・看護組織と人材育成・・・45分 演習 1：自組織の現状分析（個人ワーク） ・・・30分 ・自施設や看護部の理念・目的 ・自施設の看護部の組織・体制・看護職員数（職員数の構成） ・入院患者や入院患者の特徴（疾患、年齢構成、転帰） ・自施設の地域性・ニーズ、連携する保健医療福祉機関など
	休憩 10 分 10:55～12:30	講義 2 企画に必要な知識 ・成人学習論・・・45分 ・コンサルテーション・・・30分 ・教育評価・・・20分
1 日目	13:30～14:15	講義 3 研修計画立案のプロセス ・・・45分 演習 2：以下の内容から自組織の現状分析 個人ワーク ・・・20分 ・自施設の教育に関する研修計画・教育評価 グループワーク ・・・80分 ・各施設の自組織の現状分析の共有 ・現状分析から見えてきたことをグループ内で発表・討議 個人ワーク ・・・20分 ・自施設の研修の現状を見直し、気づいたことのまとめ
	休憩 10 分＋移動 5 分 14:30～16:30	
2 日目	9:30～12:00	演習 1 グループワーク ・・・120分 ・前日の演習 2 を踏まえてグループ内で共有 ・グループ内の 1 施設を選出し、教育計画の立案
	休憩 10 分 13:00～14:50 休憩 10 分 15:00～16:10	演習 1 の続き ・・・110分 ・教育計画の具体的立案＋発表ポスター作成 演習 2 研修計画の発表・まとめ ・G で 4 回発表（発表 7 分＋質疑応答 3 分）・・・ポスターツアー（40 分） ・他 G からのアドバイス、研修企画を参考にして、企画案の精錬 ・「自施設独自の研修立案」宣言（30 分）

6. 情報発信・ネットワーク化

1) ホームページからの発信

ホームページでは、一昨年にリニューアルした後、プロジェクトの成果物や各研修成の情報を追加しながら、情報発信している。<https://www.n.chiba-u.jp/center/index.html>

The screenshot shows the website for the Center for Education and Research in Nursing Practice at Chiba University. The header includes the university's name in Japanese and English, a search bar, and navigation links. The main banner features a world map and the text '地域で人々の生命・生活・人生を支える看護職輩出 教育・研究・実践をつなぐ' (Nursing professionals who support the lives, lives, and lives of people in the community, connecting education, research, and practice). Below the banner, there are sections for '最新情報' (Latest Information) and 'プロジェクトとその成果' (Projects and their achievements). The '最新情報' section lists several events, including seminars and workshops. The 'プロジェクトとその成果' section highlights the '看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発事業' (Continuous Quality Improvement (CQI) Model Development Project) and the 'FD マザーマップ® 支援データベース' (FD Master Map® Support Database).

2) FD マザーマップ®データベースを通じた相互支援

FD マザーマップ®データベースへの登録大学は、現在、41 大学である。各大学が登録している FD 企画の多くは、自大学以外にも公開可能であるため、登録大学間で FD 企画を参照することが可能である。

3) 事業を通じた講師・専門家会議メンバーとの協働

2018 年度の看護学教育ワークショップでは、前年度の看護学 FD 企画者研修に参加された大学に講演を依頼し、学びを得た大学が次の学びの場で、その経験を情報発信するネットワーク化がすすんだ。また、2つのプロジェクト研究の調査に際して、多くの大学に共同研究者や専門家の立場から参画してもらい、すすめることができた。

4) 他機関との協力支援関係

日本看護系大学協議会（JANPU）とは協力関係を維持し、看護学教育ワークショップ等の開催予定を JANPU の加盟大学に情報提供してもらうなどを行った。

5) 2018 年度の新規発刊物

- ・ 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターパンフレット 2018-2019
- ・ 平成 29 年度 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター年報
- ・ 平成 30 年度 看護学教育ワークショップ報告書
- ・ 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター News Letter VOL.8
- ・ 看護学教育の継続的質改善 CQI モデル Ver.1 ワークシート



看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート



所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

ワークシート C：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す

1) これまでのプロセスを経て見えてきた③学生・教員・自大学・地域のありたい姿を、ご自身の言葉で記述してみてください。

- ☆多思考のヒント☆ 個人レベル、専門領域レベル、学部・学科レベル、大学レベルなど、どのレベルで考え始めてもよい
- ☆多思考のヒント☆
- ・ 図1の登場人物の各々について、ありたい姿を考えてみる（ありたい姿は、自分本位や、机上の理想論ではなく、現実在即し未来に向かう姿として考えてみる）
 - ・ 以下のような問いかけで、図1の登場人物の各々についてありたい姿を考え、短いフレーズや単語で表現してみる
 - 例) 「人々のLifeを支える自律的看護職」、「地域で暮らす人々」とはどのような人か
 - 例) そのためにはどのような「学びの場」があったらよいか、どのような「学生」であったらよいか、どのような「教員」だったらよいか
 - 例) 「地域の保健医療福祉機関」のありたい姿とは
 - 例) 学生が実習で看護を提供する「看護の対象となる人々」とはどのような人であったらよいか

Ⅲ. 各研究部における研究内容

1) ケア開発研究部

本研究部は、専任教員、特任研究員、システム管理学専攻大学院生、特別研究アシスタント (RA)、実践センター共同研究員により構成されている。実践センター事業として、看護学教育研究共同利用拠点の特別経費による教育関係共同実施分「看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement CQI) モデルの開発と活用促進」(H28～31 年度)、文部科学省委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究」(H30～32 年度) についてのプロジェクト研究に継続して取り組み、その一環として看護学教育ワークショップの企画実施および報告書を編纂した。FD マザーマップ開発に関する FD コンテンツ開発にも引き続き取り組み活用促進に尽力した。センターの独自事業である共同研究、大学病院副看護部長研修その他 SD および FD 研修プロジェクト成果も HP および学会発表等を通して公表し、実践と教育研究をつなぐ活動を継続している。本研究科協定校のソウル国立大学 (韓国)、コンケン大学 (タイ王国)、サンディエゴ大学 (米国) に加え、ワシントン大学 (米国)、湾岸医科大学 (アラブ首長国連邦)、シャリテ医科大学ベルリン (ドイツ) と連携し、継続的に学内・国内・国際的研究の拠点づくりを行っている。

野地有子教授は、研究代表者として第 1 期平成 25～28 年度 JSPS 科研基盤 (A) 「アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究」を終了し引き続き、第 2 期平成 29～33 年度 JSPS 科研基盤 (A) 「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」を継続した (<http://nglobe.jp/>)。インド国ムンバイで開催された 1st Maharashtra Health and Wellness Tourism Conference 2018 に招聘され研究成果について講演した。当センターの共同研究により、ドイツのシャリテ医科大学ベルリン附属病院の Judith Heepe 看護部長と、シャリテ医科大学千葉大オフィスの柏原誠特任研究員を招聘し、第 2 回 Global Health & Nursing のセミナーおよび共同研究会を開催した。平成 30 年度厚生労働省老人保健事業推進補助金「リハビリテーションを行う通所事業所における栄養管理のあり方に関する調査研究事業」研究委員として、全国調査と介護保険に関する政策提言を行った。本学医学部附属病院臨床栄養部との共同研究である千葉 NCM (Nutrition Care and Management) 研究会を主催し、病院と地域をつなぐ栄養ケアマネジメントのシステムづくりの研究を継続した。また産業看護や地域包括ケアに関する研究に従事した。

黒田久美子准教授は、実践センター事業としては、文部科学省 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業 看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発 (平成 27-29 年度) 最終報告書の編纂、その成果を生かしたパンフレット作製を中心的に実施した。成果の論文化をすすめているところである。看護学教育ワークショップにおいては、CQI モデルの Ver. 1 に基づき、ワークのすすめ方を考案した。

実践センターでの研究の他に、「認知機能低下が生じた高齢インスリン療法患者・家族の援助指針の精練と実装化」(基盤研究 C) (研究代表者) に取り組み、援助指針の精練をすすめている。また、「糖尿病患者セルフケア能力測定ツールを活用した外来患者用 ICT 看護システムの開発」(基盤研究 B) (研究分担者)、「高齢者ケアの継続・連携に関する質指標開発とシステム構築」(基盤研究 A) (研究分担者) に取り組んでいる。

その他、日本糖尿病教育・看護学会の政策委員会のメンバーとして、2020 年度の診療報酬改定に向けた提案事項を検討し、関連の調査の計画をすすめた。また、千葉県糖尿病看護研究会の顧問として、糖

尿病看護のエキスパート看護師とのネットワークのもと活動を継続している。2018年の定例会は糖尿病治療を受ける高齢者支援に関するトピックで開催し、千葉県に留まらず、関東甲信越の広範囲から参加者が集まった。

炭谷大輔特任研究員は、野地科研第1期に引き続き、第2期の特任研究員としてアプリの開発を行った。専門のITにおけるゲーミフィケーションを、保健医療福祉へ応用するための知見をまとめ発表した。

2) 政策・教育開発研究部

政策・教育開発研究部では、看護対象者の生命力が発揮できるように、その生活調整の看護支援を可能にする看護管理及び政策に関わる現状を構造的に捉え、改善すべき課題を明らかにし、看護基礎教育と連動させた看護職者の生涯にわたる教育・人材・キャリア開発のための研究を行っている。

平成30年度は、看護実践研究指導センターが運営費交付金特別経費により平成28年度より取り組んでいる「看護学教育の継続的質改善（CQI:Continuous Quality Improvement）モデル開発と活用促進プロジェクト」及び今年度新規に文部科学省より受託した「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究受託事業 学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究」の両事業に中核的にかかわり、その研究成果を発信した。

和住教授・錢准教授は、共同で、薄井坦子氏の理論創造の歴史的背景について国際学会で発表した。また、修士指導論文として、看護対象者の生命力が発揮できるように、その生活調整の看護支援を可能にする看護管理についての研究成果を発表した。

和住淑子教授は、自身が研究代表者を務める科学研究費補助金（基盤研究（B））「看護職の生涯にわたるキャリア発達を支援する体系的研修プログラムの構築」を進めつつ、千葉大学医学部附属病院と千葉大学大学院看護学研究科が『外来看護特別部会』で目指した外来看護についての取り組みを一般誌に紹介した。

錢淑君准教授は、元職場の台湾国立成功大学から医学部付属病院30周年記念学術集会において、日本の終末期在宅ケアの在り方についての講演の同時通訳を依頼され、両国間の終末期ケアの実践の現状及び地域とのネットワークシステムの運営について情報交換を行った。

IV. 看護実践研究指導センター 活用実績

平成22年度～平成30年度の拠点利用実績

(単位:人)

北海道・東北ブロック

看護学教育指導者研修	42	FD企画者研修	2
看護学教育ワークショップ	76	FD支援データベース登録	4
国公私立大学病院副看護部長研修	24	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	6
看護管理者研修	78		

関東ブロック

看護学教育指導者研修	115	FD企画者研修	10
看護学教育ワークショップ	152	FD支援データベース登録	13
国公私立大学病院副看護部長研修	65	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	8
看護管理者研修	336		

中部ブロック

看護学教育指導者研修	55	FD企画者研修	0
看護学教育ワークショップ	103	FD支援データベース登録	4
国公私立大学病院副看護部長研修	47	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	10
看護管理者研修	103		

関西ブロック

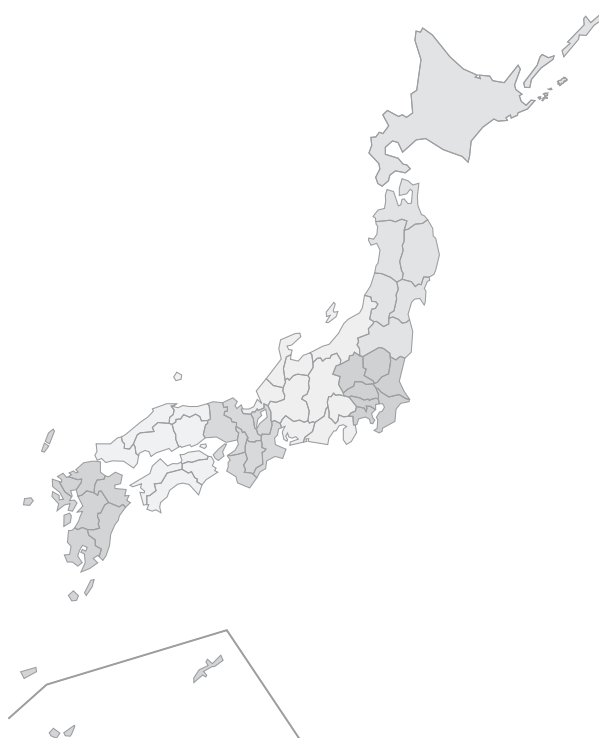
看護学教育指導者研修	30	FD企画者研修	4
看護学教育ワークショップ	82	FD支援データベース登録	7
国公私立大学病院副看護部長研修	20	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	6
看護管理者研修	95		

中国・四国ブロック

看護学教育指導者研修	40	FD企画者研修	2
看護学教育ワークショップ	93	FD支援データベース登録	8
国公私立大学病院副看護部長研修	22	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	0
看護管理者研修	84		

九州・沖縄ブロック

看護学教育指導者研修	41	FD企画者研修	2
看護学教育ワークショップ	77	FD支援データベース登録	5
国公私立大学病院副看護部長研修	31	看護系大学への講師派遣・ コンサルテーション	6
看護管理者研修	115		



V. スタッフ紹介

◇センター長



氏名 吉本 照子 (よしもと てるこ)
職名 教授
学位 博士 (保健学)
所属 センター長 (看護実践研究指導センター)
兼 地域看護システム管理学 (看護システム管理学専攻)

多様なケアの場の看護管理者が自律的なケア人材を育成し、自組織の機能の発揮と地域ケアのシステム化を推進しながら、保健医療福祉制度の維持・発展に貢献することをめざして、研究・教育を行っています。

◇ケア開発研究部



氏名 野地 有子 (のじ ありこ)
職名 教授
学位 博士 (保健学)
所属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)
看護管理学 (博士後期課程)
International program for Ph.D (国際プログラム)

Society5.0 が推進される中、様々な価値観の変換と多様性 (ダイバーシティ) に直面している社会において、看護職の役割は人々のつながりを通して益々重要になってきています。新しい看護提供システムの研究と教育から、グローバル・リーダーの育成に取り組みます。



氏名 黒田 (垣本) 久美子 (くろだ (かきもと) くみこ)
職名 准教授
学位 博士 (看護学)
所属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 実践看護評価学 (看護システム管理学専攻)

「教育－研究－実践をつなぐ」をキーワードに教育研究をすすめたいと考えています。関心のある方は是非、ご連絡をお待ちしております。



氏名 赤沼 智子 (あかぬま ともこ)
職名 講師
学位 修士 (教育学)
所属 ケア開発研究部 (看護実践研究指導センター)

◇政策・教育開発研究部



氏名 和住 淑子 (わずみ よしこ)
職名 教授
学位 博士 (看護学)
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

個々の看護職者が、看護の専門性を発揮しつつ組織に貢献していくことができるような教育体制づくり、政策形成過程について、実践と研究を重ねています。課題を共有できる全国の看護職者、看護教員と積極的に連携したいと考えています。



氏名 銭 淑君 (せん しゅくくん)
職名 准教授
学位 博士 (看護学)
所属 政策・教育開発研究部 (看護実践研究指導センター)
兼 継続教育・政策管理学 (看護システム管理学専攻)

中国の「太極図」は自然界の現象を、陰・陽両立の状態に相互変化するという万物の動きの法則を表します。看護にもこのような法則が適用すると考えられ、日々の生活、研究を通じて、その意味を検証したいと思います。

◇特任教員



氏名 上野 まり (うえの まり)
職名 特任教授
学位 博士 (看護学)
所属 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業

医療人材養成のあり方に関する研究に取り組みました。これからの社会のニーズに応える看護人材の養成は、受益者の見地からも強く望まれるところです。



氏名 稲垣 朱美 (いながき あけみ)
職名 特任助教
学位 修士 (看護学)
所属 看護学教育の継続的質改善 (CQI) モデル開発と活用推進 (看護実践研究指導センター)

国がめざす医療提供体制の構築の課題を解決し、地域で人々の Life (生命・生活・人生) を支える看護職の輩出のために必要な看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) モデルを開発する事業に取り組んでいます。

VI. 資料

1) 教育・研究活動実績

2018年4月から2019年3月

研究活動

[原著]

増澤清美, 小林寿子, 佐野麻里子, 角田ひろみ, 田中希実子, 野地有子: 産業看護職によるストレスチェック後の保健面接におけるアセスメント項目と判断プロセスの検討, 日本産業看護学会誌第5巻第1号, P1-7, 2018年8月発行.

野地有子, 野崎章子, 炭谷大輔, 大島紀子, 米田礼: メディカルツーリズムのトレンドとアカデミック・アウトルック・アラブ首長国連邦ドバイの経験を学ぶセミナーを開催してー. 日本健康科学学会学会誌, 34(4), 227-233, 2018.

野地有子, 野崎章子, Anil Bankar, 福田淳子, 炭谷大輔, 大島紀子, 米田礼: メディカルツーリズムのトレンドと看護教育の主要課題, 千大看紀要, 41, 67-73, 2019.

[招聘講演]

Ariko Noji: Academic Outlook Education and skilled workforce on Medical and Wellness tourism from Nursing perspective, The 1st Maharashtra Health and Wellness Tourism Conference, 2018, Taj Land's End, Mumbai, Maharashtra, India, 30th June, 2018.

[セミナー]

(主催)

野地有子: 第1回センター共同研究員拡大会議にて米国ワシントン大学 Noel Chrisman 名誉教授、台湾成功大学 Mei-Feng Lin 教授を招聘講演「A Novel Approach to Patient Care: Transcultural Nursing」、「Whether Cultural Competence Can Be Facilitated by Emotion-Focused Communication in Clinical Encounters」, 聖路加国際大学会議室、2018年5月26日

野地有子: 第2回グローバルヘルス国際セミナー開催, シャリテ・ベルリン医科大学病院看護部長 Judith Heepe 氏を招聘講演 Nursing in Germany, 千葉大学ベルリンオフィス柏原誠客員研究員による「シャリテ医科大学紹介と千葉大学との連携について」, 看護学研究科 講義・実習室, 2019年3月19日

野地有子：第4回センター共同研究員拡大会議にてシャリテ・ベルリン医科大学病院看護部長 Judith Heepe 氏を招聘講演, 1) Intercultural Competence Training 2) Patient Safety in Germany , TKP 東京駅カンファレンスセンター, 2019年3月20日.

[学会発表]

1. T. Yamamoto, Y. Wazumi, S. Saitou, F. Kawabe, S.C. Chien, H. Toda , H. Yamagishi, T. Maeda, C. Matsuda , Y. Kanai :The Background and Theorization Process of the Japanese Nursing Theorist- Usui Hiroko’ s “Scientific Nursing Theory” in Japanese as [KAGAKUTEKI KANNGORONN]. NETNEP2018 -7th International Nurse Education Conference. 7th May, 2018, Banff Centre for Arts and Creativity, Canada.
2. Junko Fujimura, Translator by S.C. Chien :The end of life care in Japan - a long-term care institution’ s experience. National Cheng Kung University hospital Celebration for 30th Anniversary, International Conference on Hospice Palliative Care. 8th Jun, 2018, Tainan, Taiwan.
3. Hata Tuneto, Translator by S.C. Chien : An approach to hospice care based on the experiences of home health care in Japan. National Cheng Kung University hospital Celebration for 30th Anniversary, International Conference on Hospice Palliative Care. 9th Jun, 2018, Tainan, Taiwan.
4. 和住淑子：「病気とは回復過程である」がもたらす世界の見方の転換とその共有ー『看護覚え書』と『思索への示唆』の記述を手がかりとしてー. ナイチンゲール研究学会第39回研究懇談会, 2018.
5. 川合いずみ, 和住淑子, 多田則子：患者の全体性を時間軸でとらえ自律的判断のできる救急病棟スタッフ看護師の育成. 第22回日本看護管理学会学術集会電子抄録集, <http://kcon.expcp.jp/janap22/>, 2018.
6. 箭内博子, 和住淑子, 錢淑君：地域で生きる患者を支える退院支援の構築ー高度急性期病院における病棟看護師の退院支援能力の育成を通してー. 第38回日本看護科学学会学術集会電子抄録集, <https://confit.atlas.jp/guide/event/jans38/subject/012-1/advanced>, 2018
7. 飯岡由紀子, 松岡千代, 小川純子, 遠藤和子, 吉本照子：「臨地実習において配慮が必要な学生に対するFDプログラムレベル2の試行と評価. 日本看護学教育学会第28回学術集会プログラム・講演集, 145, 2018.
8. 小川純子, 遠藤和子, 飯岡由紀子, 吉本照子, 松岡千代：臨地実習において配慮が必要な学生への教育上の調整. 第38回日看科会学術集会電子抄録, 2018.
9. Ariko Noji, Akiko Nosaki, Eiko Otomo, Manami Sakamoto, Mari Kondo, Sachiko

Iijima, Sayaka Kotera, Akiko Mizobe, Koji Kobayashi, Daisuke Sumitani : Difficulties in delivering nursing care to international patients among Japanese nurses : A qualitative approach, The 7th Global Congress for Qualitative Health Research 6/20-22/2018, Seoul, Korea

10. 野本尚子, 野地有子, 野崎章子, 櫻井健一, 中野香名, 新井誠人, 滝口裕一, 古川勝規, 岡本美孝 : 通院治療室におけるがん化学療法受療者の栄養状態の実態—栄養指標と人口学的属性との関連—, 第 18 回日本健康・栄養システム学会, 神奈川・神奈川県立保健福祉大学, 2018 年 6 月 23 日~24 日.
11. 野地有子, 目黒春奈, 藤本早矢也, 田澤敦代, 曳地陵子, 野本尚子, 中野香名, 五十嵐大輔, 米山晶子, 岡本美孝 : 外来化学療法を受けているがん患者の食事と栄養面の支援について—通院治療室の管理栄養士と看護師へのインタビューを通して—, 第 18 回日本健康・栄養システム学会, 神奈川・神奈川県立保健福祉大学, 2018 年 6 月 23 日~24 日.
12. 高田健人, 堤亮介, 長瀬香織, 田中和美, 高田和子, 宇田淳, 榎裕美, 大原里子, 加藤昌彦, 苅部康子, 遠又靖丈, 西村秋生, 西宮弘之, 野地有子, 馬場真佐美, 和田涼子, 松山砂奈江, 藤川亜沙美, 長谷川未帆子, 小山秀夫, 杉山みち子 : 認知症対応型共同生活介護における栄養管理の在り方に関する調査研究—事業所、職員、入居者実態調査から—, 第 18 回日本健康・栄養システム学会, 神奈川・神奈川県立保健福祉大学, 2018 年 6 月 23 日~24 日.
13. 堤亮介, 高田健人, 長瀬香織, 田中和美, 高田和子, 宇田淳, 榎裕美, 大原里子, 加藤昌彦, 苅部康子, 遠又靖丈, 西村秋生, 西宮弘之, 野地有子, 馬場真佐美, 和田涼子, 松山砂奈江, 藤川亜沙美, 長谷川未帆子, 小山秀夫, 杉山みち子 : 認知症対応型共同生活介護入居者における低栄養と個別要因及び管理栄養士による関わりとの関係, 第 18 回日本健康・栄養システム学会, 神奈川・神奈川県立保健福祉大学, 2018 年 6 月 23 日~24 日.
14. 野地有子, 野崎章子, 近藤麻理, 飯島佐知子, 小寺さやか, 溝部昌子, 大友英子, 坂本真奈美, 小林康司, 浜崎美子 : 病院の国際化における外国人患者への質の高い看護提供を目指して—看護管理の視点から—, 第 22 回日本看護管理学会学術集会抄録集, P197, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018 年 8 月 24 日~25 日.
15. 小川外志江, 小藤幹恵, 日向恵美, 内出裕美, 蓮間倫世, 野地有子 : 入院準備室の総説と入院予定病棟につなぐシステムの構築—安全安心な生活支援を入院前から行う看護ケアの開発—, 第 22 回日本看護管理学会学術集会抄録集, P216, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018 年 8 月 24 日~25 日.
16. 水野雅子, 増渕美恵子, 野地有子, 大島紀子 : 救命救急病棟看護師の退院支援能力開発 (第 1 報) —患者・家族のニーズと地域包括ケアの視点から退院支援計画シートの作成まで—, 第 22 回日本看護管理学会学術集会抄録集, P222, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018 年 8 月 24 日~25 日.

17. 水野雅子, 増渕美恵子, 野地有子, 大島紀子: 救命救急病棟看護師の退院支援能力開発 (第2報) —患者・家族のニーズと地域包括ケアの視点から退院支援計画シートを活用して—, 第22回日本看護管理学会学術集会抄録集, P223, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018年8月24日～25日.
18. 松岡光, 飯島佐知子, 大西麻未, 野地有子, 野崎章子, 丸山恭子: 日本に滞在する外国人から見た日本の病院の看護の質の評価, 第22回日本看護管理学会学術集会抄録集, P229, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018年8月24日～25日.
19. 大島紀子, 野地有子: 産業看護職がおこなう保健面接の現状と課題 保健面接に関する文献検討を通して, 第34回日本健康科学学会学術大会抄録集, P186, 神奈川県・神奈川県歯科医師会館, 2018年8月30日～31日.
20. 野地有子, 野崎章子, 炭谷大輔, 米田礼: メディカルツーリズムのトレンドとアカデミック・アウトルック—アラブ首長国連邦ドバイの経験を学ぶセミナーを開催して—, 第34回日本健康科学学会学術大会抄録集, P187, 神奈川県・神奈川県歯科医師会館, 2018年8月30日～31日.
21. 炭谷大輔, 野地有子: 保健分野におけるゲーム要素の活用事例に関する文献検討—モバイルアプリケーションの活用実態—, 第34回日本健康科学学会学術大会抄録集, P188, 神奈川県・神奈川県歯科医師会館, 2018年8月30日～31日.
22. 松田美智代, 野地有子: 精神科病棟における身体拘束ゼロに向けた取り組みの成果と課題, 第34回日本健康科学学会学術大会抄録集, P190, 神奈川県・神奈川県歯科医師会館, 2018年8月30日～31日.
23. 溝部昌子, 野地有子, 近藤麻理, 小寺さやか: 医療における職員ダイバーシティでの文化の調整・適応の一例—カンボジアA病院での調査より—, 第38回日本看護科学学会学術集会, ひめぎんホール, 愛媛県, 12/15～16, 2018.
24. 野地有子, 野崎章子, 溝部昌子, 近藤麻理, 小寺さやか, 飯島佐知子: 外国につながる人々への看護ケア—異文化との出会い42病院マップの開発と活用—, 第9回日本看護評価学会学術集会抄録集, 東京工科大学蒲田キャンパス, 東京都, 2019年3月11日～12日.

[報告書]

1. 杉山みち子, 小山秀夫, 野地有子ほか: 『認知症対応型共同生活介護における栄養管理のあり方に関する調査研究事業』報告書, 平成29年度厚生労働省老人保健事業推進等補助金 (老人保健健康増進等事業分), 日本健康・栄養システム学会, 2018年3月.
2. 野地有子: 公的病院におけるELNEC教育プログラムの開発 ELNEC高齢者版モジュールの事例 コンテンツ事例集, 附属看護実践研究指導センター, 2018年3月.
3. 野地有子, 溝部昌子, 近藤麻理, 小寺さやか, 野崎章子, 炭谷大輔: 10年後を見据えた

グローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書 Vol.2, 附属看護実践研究指導センター, 2018年3月.

4. 吉本照子, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君, 赤沼智子, 吉田澄恵:平成29年度看護実践研究指導センター年報. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 2018.
5. 餘目 千史, 飯田 直子, 金子 佳世, 黒田久美子, 古賀 明美, 高橋 良幸, 中元 美恵, 任 和子, 肥後 直子, 古山 景子, 水野 美華, 森山 美知子, 柳井田 恭子:平成32年度診療報酬改定にむけた JADEN の要望を検討する, 日本糖尿病教育・看護学会誌 (22) 特別号, 96, 2018年9月
6. 吉本照子, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君, 稲垣朱美:平成30年度 看護学教育ワークショップ報告書「自大学の強みや使命を活かす CQIー自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る」. 看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター, 2019.
7. 吉本照子, 野地有子, 和住淑子, 黒田久美子, 錢淑君, 稲垣朱美:看護学教育の継続的質改善 CQI モデル Ver.1 ワークシート, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 看護学教育の継続的質改善 (CQI:Continuous Quality Improvement) モデル開発と活用促進プロジェクト, 2019年3月
8. 吉田多紀, 清水安子, 内海香子, 黒田久美子, 正木治恵:糖尿病患者のセルフケア能力の要素を活用した看護師への教育プログラムの中国での実施の試み, 文化看護学会第11回学術集会抄録集, 2019年3月
9. 野地有子, 溝部昌子, 近藤麻理, 小寺さやか, 野崎章子, 相原綾子, 炭谷大輔, 米田礼:10年後を見据えたグローバル人材育成・国際交流の推進 コンテンツ報告書 Vol.3, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践指導センター, 2019年3月.
10. 野地有子, 野崎章子, 溝部昌子, 飯島佐知子, 近藤麻理, 小寺さやか, 炭谷大輔, 米田礼:科研事業中間報告書 FY2017-2018 国際シンポジウム・セミナー, 2019年3月.
11. 吉本照子, 和住淑子, 野地有子, 黒田久美子, 錢淑君, 上野まり;平成30年度文部科学省委託事業大学における医療人養成の在り方に関する調査研究 学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践指導センター, 2019年3月.

[総説・短報・実践報告・資料・その他]

1. 吉本照子, 吉田澄江, 和住淑子, 黒田久美子, 野地有子, 錢淑君:CQI モデルの開発で看護学教育の自律的改善を支援する, 2018年4月2日週刊 医学界新聞第3270号.
2. 野地有子 (監修):クエスチョンバンク 保健師国家試験問題解説 2019 第11版 2018年4月発行.
3. 野地有子 (監修):保健師国家試験のためのレビューブック 2019 第19版, 2018年

4月発行.

4. 野地有子:海外で、日本で、国際的な仕事への挑戦に踏み出すきっかけとできる書 『知って考えてみる 国際看護 第2版』近藤麻理著, P901, (書評)看護教育 Vol. 59No. 10, 2018年10月発行.
5. 野地有子:研究者と実践者の出会いコーナー, 第22回日本看護管理学会学術集会, 神戸ポートピアホテル/神戸国際会議場, 兵庫県, 2018年8月24日~25日.
6. 野地有子:しおり 2018 異文化との出会い病院マップ編, 平成30年8月31日発行.
7. 金澤薫, 和住淑子:千葉大学医学部附属病院と千葉大学大学院看護学研究科が『外来看護特別部会』で目指した外来看護の理想の形. 看護展望, 43(4), 6-14, 2018

教育活動(学外)

1. 平成30年4月~平成30年3月 和住淑子
 - ① 派遣先:千葉県救急医療センター
 - ② 目的:看護研究個別指導・発表会指導
2. 平成30年5月29日 和住淑子・黒田久美子
 - ① 派遣先:千葉大学医学部附属病院
 - ② 目的:「シニアプリセプター実践研修」講義, グループワークファシリテーター
3. 平成30年6月19日 和住淑子
 - ① 派遣先:東京都看護協会
 - ② 目的:ファーストレベル研修講師(「看護専門職論」担当)
4. 平成30年7月9日 和住淑子
 - ① 派遣先:宮城大学大学院看護学専攻
 - ② 目的:「看護理論」非常勤講師
5. 平成30年8月6日 和住淑子
 - ① 派遣先:埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科看護学専修
 - ② 目的:「看護理論」非常勤講師
6. 平成30年8月9日 和住淑子
 - ① 派遣先:大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
 - ② 目的:「看護理論」非常勤講師
7. 平成30年8月11日 和住淑子
 - ① 派遣先:能美市立病院
 - ② 目的:看護管理者研修 講師
8. 平成30年8月27日 野地有子
 - ① 派遣先:山武郡保健福祉センター, 千葉県
 - ② 目的:平成30年度看護管理者研修会「外国人患者への対応について」講師
9. 平成30年9月15日 和住淑子

- ① 派遣先：岐阜県立看護大学大学院看護学専攻
 - ② 目的：「看護政策論」非常勤講師
10. 平成 30 年 10 月 8 日 野地有子
- ① 派遣先：聖徳大学
 - ② 目的：平成 30 年度臨床栄養師認定講座 13「地域栄養活動」講師
11. 2018 年 11 月 3 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉県糖尿病看護研究会（千葉市 京成ミラマーレホテル）
 - ② 目的：第 23 回千葉県糖尿病看護研究会「看護現場で感じる何かへん？をみんなで考えよう～多様化する糖尿病治療を高年齢者支援に活かすために～」
グループワークファシリテーター
12. 平成 30 年 11 月 5 日 和住淑子
- ① 派遣先：東京都看護協会
 - ② 目的：ファーストレベル研修講師（「看護専門職論」担当）
13. 2018 年 11 月 22 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉県立長生高校
 - ② 目的：「大学教授と語る会」講師
講義「生活を支える看護の開発一病をもちつつ生きる高齢者への支援を通して」
14. 平成 30 年 11 月 26 日 野地有子
- ① 派遣先：ドイツ国シャリテ医科大学 健康看護学研究科
 - ② 目的：看護学部開設カリキュラム検討会 アドバイザー
15. 2018 年 11 月 30 日 黒田久美子
- ① 派遣先：千葉大学医学部附属病院
 - ② 目的：シニアプリセプター実践研修
講義「来年度の部署の教育計画立案に向けた教育評価」
グループワークファシリテーター
16. 平成 30 年 12 月 19 日 和住淑子
- ① 派遣先：湘南医療大学
 - ② 目的：FDマザーマップ研修会「FDマザーマップコンテンツ事例を用いたグループワークを通して、本学のFDを考える」講師
17. 平成 31 年 2 月 18 日 和住淑子
- ① 愛知医科大学看護学部
 - ② 目的：教育セミナー「FDマップの作成と活用」講師
15. 平成 31 年 3 月 7 日 野地有子
- ① 派遣先：ドイツ国シャリテ医科大学 健康看護学研究科
 - ② 目的：看護学部開設カリキュラム検討会 アドバイザー
16. 平成 30 年度 野地有子
- ① 派遣先：千葉県看護協会

② 目的：認定看護管理者教育課程運営委員会 副委員長

2)職員配置

附属看護実践研究指導センター

研 究 部	職 名	氏 名
セ ン タ ー 長	教 授	吉 本 照 子
ケ ア 開 発 研 究 部	教 授 准教授 講 師	野 地 有 子 黒 田 久 美 子 赤 沼 智 子
政 策 ・ 教 育 開 発 研 究 部	教 授 准教授	和 住 淑 子 錢 淑 君

大学院看護学研究科看護システム管理学

領 域	職 名	氏 名
病 院 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授	手 島 恵
地 域 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授 講 師	吉 本 照 子 飯 野 理 恵
ケ ア 施 設 看 護 シ ス テ ム 管 理 学	教 授	酒 井 郁 子

外部資金等

名 称	職 名	氏 名
大学における医療人養成の在り方に関する 調査研究委託事業	特任教授	上 野 まり
看護学教育 CQI モデル開発と活用推進	特任助教	稲 垣 朱 美

3) 看護実践研究指導センター運営協議会記録

運営協議会委員名簿

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (看護学研究科長)	中村 伸枝	千葉大学大学院看護学研究科長
2号委員 (センター長)	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長
3号委員	諏訪 さゆり	千葉大学大学院看護学研究科教授 (千葉大学評議員)
	手島 恵	千葉大学大学院看護学研究科教授
	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教授
4号委員	市川 智彦	千葉大学大学院医学研究院教授
	後藤 友美	厚生労働省医政局看護課課長補佐
	小見山 智恵子	東京大学医学部附属病院看護部長
	小宮山 伴与志	千葉大学教育学部長
	佐藤 美穂子	日本訪問看護財団常任理事
	武田 淳子	宮城大学看護学研究科理事・副学長
	上泉 和子	青森県立保健大学学長・理事長

平成31年2月22日現在

第38回看護実践研究指導センター運営協議会

1. 日 時 平成31年2月22日（金）17時30分～19時15分
2. 場 所 千葉大学看護学部 大会議室（管理棟2階）
3. 出席委員 中村会長（看護学研究科長）、吉本委員（看護学研究科附属看護実践研究指導センター長）、諏訪委員、手島委員、野地委員、和住委員、後藤委員、小見山委員、小宮山委員、佐藤委員、上泉委員

4. 議 題

- (1) 平成30年度センター事業報告及び2019年度事業計画（案）について

I. 研修事業

- ① 国公立大学病院副看護部長研修（センター独自事業）
- ② 看護学教育指導者研修ベーシックコース（センター独自事業）
- ③ 看護系大学FD企画者研修（センター独自事業）
- ④ 看護管理者研修ベーシックコース（委託事業）
- ⑤ 看護学教育ワークショップ（センター独自事業）

II. 事業・プロジェクト

- ① 看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement:CQI）モデルの開発と活用推進
- ② 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究事業
-学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究-

III. 研究活動

- ① 共同研究

IV. FD・SDの推進

- ① FDコンテンツ開発（国際交流・海外研修の危機管理 他）
- ② FD (Faculty Development) マザーマップの活用を含む個別FDコンサルテーション
- ③ CQI 関連情報の共有とネットワーク化促進のための Web システムの整備

V. 広報活動

情報発信

- ① 活動内容掲載（HP）

- ② センターパンフレット
- ③ センター年報
- ④ ニュースレター
- ⑤ 拠点インフォメーションメール

(2) 共同利用拠点の再々認定について

4) 看護実践研究指導センター運営委員会記録

運営委員会委員名簿（平成30年度）

委員区分	氏名	職名等
1号委員 (センター長)	吉本 照子	看護実践研究指導センター長 教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
2号委員	野地 有子	教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	和住 淑子	教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	黒田 久美子	准教授 (看護実践研究指導センターケア開発研究部)
	錢 淑君	准教授 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
	赤沼 智子	講師 (看護実践研究指導センター政策・教育開発研究部)
3号委員	手島 恵	教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	酒井 郁子	教授 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
	飯野 理恵	講師 (大学院看護学研究科看護システム管理学専攻)
4号委員	諏訪 さゆり	教授 (大学院看護学研究科看護学専攻)

看護実践研究指導センター運営委員会（平成30年度実施分）

年月日 平成30年4月11日（水） 16:35～17:10
議題等 1.平成30年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）の募集について
2.平成30年度看護学管理者研修（ベーシックコース）の募集について
3.平成30年度看護系大学FD企画者研修の募集について
4.平成30年度国公立大学病院副看護部長研修応募者の採否について
5.平成30年度共同研究員の採否について
6.平成30年度予算案について

年月日 平成30年5月23日（水） 15:00～15:47
議題等 1.平成30年度看護系大学FD企画者研修応募者の採否について
2.平成30年度看護学教育ワークショップ実施要項（案）について

年月日 平成30年6月4日（月） 持ち回り審議
議題等 1.《追加審議》平成30年度看護系大学FD企画者研修応募者の採否について

年月日 平成30年6月20日（水） 16:05～16:34
議題等 1.平成30年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）の採否について
2.平成30年度看護管理者研修（ベーシックコース）の受講者の採否について
3.平成30年度FD企画者研修プログラムについて
4.平成30年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）のプログラムについて
5.平成30年度看護管理者研修（ベーシックコース）のプログラムについて
6.平成30年度看護学教育ワークショップについて

年月日 平成30年9月3日（月）～9月6日（木） 持ち回り審議
議題等 1.平成30年度看護学教育ワークショップの参加者決定について
2.看護実践教育指導センター運営協議会委員の選出について

年月日 平成30年度12月5日（水）～12月10日（月） 持ち回り審議
議題等 1.今年度特任教授の採用について
《補足》文部科学省委託事業（学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究）が採択され、本事業の業務遂行のため、特任教員1名を雇用することとなった。既に学評では報告済みであるが、12月12日の特別教授会に諮る必要があるため、メール審議することとなった。なお、当特任教授候補者は平成31年1月1日～今年度末までの雇用予定である。
2.来年度特任教員の募集要項（案）について
《補足》文部科学省委託事業（学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究）及びCQI事業の遂行のための特任教員の公募について、募

集要項（案）を審議したい。

3. 看護実践教育指導センター運営協議会委員の選出について

年月日 平成31年1月16日（水） 16：20～17：05

議題等 1. 2019年度附属看護実践研究指導センター研修日程（案）について

年月日 2. 2019年度共同研究の募集について

3. 2019年度国公立大学病院副看護部長研修について

年月日 平成31年2月13日（木） 15：00～16：10

議題等 1. 2019年度事業計画（案）について

5) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター規程

平成16年4月1日制定

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人千葉大学の組織に関する規則第16条に定める千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター（以下「センター」という。）の管理運営に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、教育関係共同利用拠点として、看護学の実践的分野に関する調査研究、専門的研修その他必要な専門的業務を行い、かつ、国立大学法人の教員その他の者で、この分野の調査研究に従事するものの利用に供することを目的とする。

(研究部)

第3条 センターに、次の研究部を置く。

- 一 ケア開発研究部
- 二 政策・教育開発研究部

(職員)

第4条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授、准教授、講師、助教、助手及びその他の職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの管理運営に関する業務を総括する。

- 2 センター長の選考は、看護学研究科の専任の教授の中から研究科長の推薦により学長が行う。
- 3 センター長の任期は2年とし、1回を限度として再任することができる。

(運営協議会)

第6条 センターに、センターの事業計画その他運営に関する重要事項を審議するため、センター運営協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第7条 協議会は、次に掲げる者をもって組織する。

- 一 看護学研究科長
- 二 センター長

三 看護学研究科教授会（以下「教授会」という。）構成員の中から研究科長が選出した者若干名

四 看護学研究科外の学識経験者若干名

2 前項第3号及び第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 第1項第4号の委員は、看護学研究科長の推薦により学長が選考し、委嘱する。

（会長）

第8条 協議会に会長を置き、看護学研究科長をもって充てる。

2 会長は、協議会を召集し、その議長となる。

（運営委員会）

第9条 センターに、次の事項を審議するため運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

一 センターの事業計画に関すること。

二 センターの予算の基本に関すること。

三 その他センターの管理運営に関すること。

（組織）

第10条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

一 センター長

二 センター所属の教授、准教授及び講師

三 看護システム管理学専攻専任の教員

四 教授会構成員（前2号に掲げる者を除く。）の中から研究科長が選出した者3名

（委員長）

第11条 委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

（会議）

第12条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き議決することができない。

2 委員会の議決は、出席委員の過半数の同意をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

3 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させることができる。

（共同研究員）

第13条 センターは、国立大学法人の教員その他の者で看護学の実践的分野に関する調査研究に従事するものを共同研究員として受け入れることができる。

2 共同研究員に関し必要な事項は、別に定める。

(研修)

第14条 センターは、必要に応じ看護教員及び看護職員の指導的立場にある者に対し研修を行うものとする。

2 研修に関し必要な事項は、別に定める。

(事務処理)

第15条 センターの事務は、看護学部事務部において処理する。

(細則)

第16条 この規程に定めるもののほか、この規程の実施に関し必要な事項は、研究科長が定める。

附 則

1 この規程は、平成16年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際国立大学法人法（平成15年法律第112号）附則別表第1の上欄に掲げる千葉大学（以下「旧千葉大学」という。）において定められた千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧千葉大学において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成17年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

1 この規程は、平成21年4月1日から施行する。

2 この規程の施行の際千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター規程（以下「旧規程」という。）第7条第1項第3号及び第4号の規定により任命された委員である者は、この規程の施行の日において、それぞれ第7条第1項第3号及び第4号により任命されたものとみなす。この場合において、その任命されたものとみなされる者の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、それぞれ旧規程において付された任期の末日までとする。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

看護実践研究指導センター年報

№. 37 (平成30年度)

令和元年5月発行

編集兼発行者 千葉大学大学院看護学研究科
附属看護実践研究指導センター
〒260-8672
千葉市中央区亥鼻1丁目8番1号
TEL 043-226-2464

印刷所 三陽メディア(株) 千葉営業所
千葉市中央区浜野町1397
TEL 043-266-8437

千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター

〒260-8672

千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1

TEL 043-226-2464

URL <https://www.n.chiba-u.jp/center/>